



西細重諸島志

ル 7
3357



門 7
號 3357
卷

亞細亞諸島志

東洋

抑モ亞細亞洲ノ大地ヲ離レテ其海中ニ在ルノ諸島其中

既ニ我邦歐羅巴洲ニ於テヨクコレヲ詳ニスルヲ得ル

者アリ又尚未タ其詳ナルヲ得ザル者モアリ此大洲ノ南

ノ方ヨリシテ遙ニ其東ノ方ニ至ルノ諸島其内最世ニ著

シクシテ且其産物豊饒繁庶ナル者ノ如キハ皆歐羅巴ノ

人既ニコレニ通シテ或ハ其地ヲ有テ又ハ商賈交易シテ

利ヲ得ルヲ極テ夥シク年々ニ船ヲ通シ往來ヲナスヲ益

亞細亞諸島志

早稲田大學圖書館
昭和26.2.9
蔵

盛ニナル者ハコレ其初ノ波爾杜瓦爾國ノ人始メテ亞弗
利加洲ノ極南界ナル喜望峯ヲスキ一十五百年日本册
應九年
明弘治ノ比ヨリシテ東方ニ通ズルノ海道ヲ開キテヨリ
以来ノ事ナリ

凡亞細亞洲海中ノ諸島ヲ船師ノ語ニテハ呼テオマスト
インガイ東方印度ト云
ヘル義ナリノ諸島ト云フ也

此諸島海中ニ散在スルト雖モ其内多クハ一處ニ相聚リ
附近セル者アルニ因テ其總名ヲ加ヘテ以テコレヲ區別
セリ其總名ハ其最西ニアル者ヲ馬兒地襪ノ諸島ト名ク
次ニラタ井チヒセノ諸島次ニシユングノ諸島次ニ馬路

古ノ諸島次ニ非利皮那ノ諸島次ニ新非利皮那ノ諸島次
ニマリア子スノ諸島其東方ノ末ニ至テ日本ノ諸島アリ

今順次ヲ逐テコレヲ説ク一尤ノ如シ西洋ニテ我日本ノ
事ヲ記スモノハエ
ンゲルヤルトケシフルト云人ノ著ス所ノ日本志アリ崎
陽ノ中野柳圃其中ノ最緊要ナル者ヲ採ルコレヲ記シテ
鎖國論ニ卷トナスアル
故ニ此ニコレヲ畧セリ

馬兒地襪之諸島

此諸島ハ印度大海ノ中ニ在テ印度ノ極南界ナル古木領
峯ノ西南ニ當リ赤道昼夜平分線ノ南北ニ跨カレリコレ
ニ因テ分ケテ南北ノ二部トスル其一ハ赤道ノ北ニ在ル
者其二ハ赤道ノ南ニ在ル者ナリ凡此諸島其南ハ赤道以

南ノ緯二度ニ起リ北ハ赤道以北ノ緯八度ノ邊ニ至ル十
リ和蘭ノゲラルトヨルストハンケウレントイヘル人ノ
撰スル所ノ萬國經緯度表ニハ此島其南ハ赤道以南緯
ノ緯〇度二十八分ニ起リ以北ノ緯七度二十〇分ニ至ル
ト記セリ追テ訂スヘシ

此諸島ノ數ハ甚分明ナラス或ハ云其數凡一萬許アリト
或ハ尚コレニ一二十ノ數ヲ増シ云者モアリコレ此諸島
極テ小ニシテ且夥キガ故ニ其數ヲ詳ニスルヲ容易ニハ
為シガタク或ハ其間ニ只沙渚或ハ岩石ノミナルモアリ
或ハ無人ナルモアリテ疑シキニ因テ地志ヲ作ル者モマ
々其沙渚岩石ノ類ヒテモ錯雜シテ島ト為スモアレハ十
リノ諸島ハニ非休史派ノ諸島ハニ非休史派ノ諸島ハ

此諸島ハ一千五百零七年

日本永正四年
明正徳二年

ニ波爾杜瓦爾因

ノ人始メテコレヲ見出シテヨリ世ニ此島アルヲ知レ

リ

此諸島ノ内ニ於テ最大ナル者ヲ「マレ」ト名ク又麻辣襪ル
ノ地ノ方言ニ島ヲ「チ」ヘト云コレ則此諸島ノ總名ニ因テ
起ル所ニシテ「マレ」島ハ他ノ諸島ニ勝レテ大ナルニ因テ
遂ニ以テ諸島ヲモ合称スルナリ然レ氏「マレ」島モ其周圍
僅ニ入尔馬泥亞ノ里法ニテ一里日本ノニ過キス

此諸島ノ周圍ハ沙渚及岩石アリテマ々其間ニ大水通流
スルニ因テ其島凡十三処ニ分レ聚ル其大水ノ通流スル

此ニコレヲ以テ甚分別辨認シ易スケレト其島ノ間ノ沙
渚岩石アル邊ハ大船通シガタシ然レト土人ハ沙渚岩石
等ヲ使リトシテ隣嶋ノ往來ニ宜シトスル

其諸嶋ノ間ヲ流ル大水ニ因テ海峡ノ如キ形ヲ成ス者ノ
内一ノ最大ナル者アリテコレハ舟船往來ニ宜シ此處ノ

海水一年ノ内六箇月ハ東ヨリ流レ六箇月ハ西ヨリ流ル

其處ハ廣サ凡二十五里日本ノ五十里アリ其他ノ海峡ハ其幅皆

狭シ凡此諸島及海峡等ノ凶ハヘルマンモツルト云人諳

厄利亞國ニ於テ刊行スル處ノ者其方位幅員廣狹等極テ

精密ナリ一十五百零九年日本永享五年ニ於テ林氏林氏國

此諸嶋ノ中ニ拾テ其赤道ノ直下ニ居ル者ハ其昼夜終歲

相同シクシテ長短十ク氣候酷熱不順ニシテ其土人ト雖

モ多ク疾病ヲ生ゼリ又其地甘水乏クシテ人コレヲ苦ム

此地總ヘテ上ニ云處ノ如クナル故歐羅巴ノ人敢テ此ニ

居ヲ占ル者ナシ只時々交易ヲ為スノミ土産珊瑚竜涎多

シ又其産スル所ノ玳瑁ハ其質美ナルヲ印度諸國ニ冠タ

リ又夥クキンキホオルンチイスト云ヘル小貝ヲ産セリ

コレヲ一名又モオレンタンデン又コリイスト云土人コ

レヲ以テ錢ニ代ヘ以テ隣傍ノ諸國ト交易ヲ為ス

此諸嶋他ノ菓樹アルヲ見ズ只多ク椰樹ヲ産セリ其菓最

上品也其樹幹直ニシテ枝十ク頂上ニ至テ帷長キ葉ヲ生
セリ菓ハ葉ノ下ニ懸ル一樹ニ菓ヲ結フ一十二 其
大サハケエゲルコトオト 弄丸ノ類ノ如シ此菓ノ裡面初
未詳ナラス
ノハ悉ク液汁ノミナリコレヲ以テ一種ノ酒ヲ醸スベシ
日ヲ經ルニ隨テ核滿ツ此核又味美也此核ヨリモ搾リ出
スノ液汁ハ以テ諸ノ飲食ニ調和スベク油モ亦諸般ノ用
ニ供ス也其液汁ニテ造ル処ノ酒ヲ名テシユラト云又酢
及焼酒ヲモ製セリ其菓ノ殼ハ色黯赤ナリ以テ紐約及他
ノ器物ヲモ製シテコレヲ歐羅巴ニモ輸シテ人コレヲ珍
重スル殼ノ外ナル皮ハ製シテ纜繩トナシ樹ノ材ハ以テ

家及船ヲモ造ルベク葉ハ編テ帆ト成スベク又瓦ニ代ヘ
テ屋ヲ覆フベシ外皮ノ内ニ膜皮アリ製シテ糸ト成スヘ
シ其核又法ヲ以テ製スレバ紙ト成スヘシ一木ノ用其利
甚多シ土人コレヲ以テ緊要ノ物トスル也
此諸島其人油色ニテ皆裸躰也其王及コレニ仕ユル群臣
軍卒ノ外ハ總ヘテ髮ヲ長スル者ナシ此群臣軍士等ノ内
ニハ頗ル医学星象等ヲ曉ス者アリ其他ハ皆水ヲ游テ漁
ヲ業トスルヲナスノミ
此諸島ノ人他國ノ人ニ異ルヲアリ其地ノ百物皆稍久シ
ケレバ則虫ニ蝕セラルカヲ患フ故ニ石ヲ水中ニ沈メ箱

ノ如キモノヲ其上ニ重子疊ミテ柵ヲ海辺ニ建テコレニ屋室ヲ構ル也

此諸島悉ク一王ニ從フ此王ハ「マレ」島ヲ都トシ自ラ速魯

壇大君ノ義ナリト称シ其所属ノ諸島ヲ分テ十三部トセリ此王

ハ世々共男子タル者父ノ位ヲ嗣テ子孫傳統ノ国法ナリ

貢税ハ其民ヨリシテ五分之一ヲ取ル然レハ此島其地皆

極メテ狭小ニシテ物産モ自ラ乏キヲ以テ動モスレハ他

国ノ船ヲ寇掠セントセリ故ニ他国ノ船只此ニ至テ貨物

ヲ交易スルノミニシテ嚴ニ寇掠ヲ防キテ妄ニ船ヲ其岸

邊ニ泊メズト云フ

此諸島ノ人皆馬哈默ノ教ヲ崇信セリコレ其原始亞刺比

亞国ヨリ傳ヘタル者也

馬兒地襪諸島ノ北方ニ當リテ「ラクエチト」諸島ト称ス

ル者アリテ其数凡十八アリ而モ皆馬兒地襪ノ諸島ニ比

フレバ大ナリトスル原書此島ノ風土及物産等ヲ記ス

則意蘭島

此大島ハ印度ノ安日河ノ西ニ在テ海中ニ尖出シタル大

地ト斜メニ相對スルヨクコレヲ詳ニスルニ古ヘノ世ニ

ハ狭長ナル地峽アリテ「コロマンデル」ノ海岸ノ地ト相連

相属セリ其後海水ノ沸騰スルニ因テ此地峽水中ニ沈ミ

テ其間遂ニ海峡トナリテ相隔絶スルト雖モ今ニ至リテ
地峽ノ跡猶残リテ其処ハ沙渚ト成リテ兩岸ニ連直セリ
コレヲ名テ「アダムス・フリユツク」ト云フ「アダムス」ハ人ノ名
下ニ詳也今此海峡西地相隔タルノ間其幅九十二里日本ニ
十四里

此海峡ヲ世ニ名テ「マナル」ノ海峡ト云コレ其「コロマン
テル」ノ海岸ニ近キ一ノ小キ島ノ上ニ「マナル」ト云ヘル
府アルニ因テ名ル者ニシテ此処ニ於テ人多ク真珠ヲ採
ル又世ニ此海峡ヲ呼テ「シラオ」ノ海峡ト云コレハ則意蘭
島ノ海岸ニ「シラオ」ト云ヘル府アルヲ以テ名ツク者ナリ

則意蘭ハ世ニコレヲ譬ヘテ其形一ノ胡椒子ノ如シト云

ヒ又ハ一ノ垂レタル真珠ノ如シト云フ和蘭ノ人ハ又譬

ヘテ物斯法畧ノ地ヨリ出ス所一ノハムノ如シト云ハム

ノ腿ヲ冬月竈ノ上ニ鉤リ懸ケ乾カス処ノ者シテ漢ニハ
臘乾又火腿肉ト云物斯法畧ニハ歐羅巴洲入尔馬泥亞因

ノ中ノ一州ノ名ニシテ此地ヨリ出ス所ノ
臘乾ハ西洋ニ於テ最名アルニ因テナリ其幅員直径其

長キ処ハ九六十五里日本ノ一百最廣キ処ハ九三十六里

日本ノ七十二里大抵其地形ノ稍諸厄利亞本國ノ地ニ比スベシ

ト云諸厄利亞今ハ思可香亞意而蘭大及其西界ノタレス
國ヲ合セテ其地最大ナレト云其本國人ミノ地ハ原書

諸厄利亞ノ條ニ於テハ其東西九六十里南北八十里ト云
ハ此島ヨリ稍大也只其地ノ形ノ相似タルヲ以テ云ベシ

此島中殊ニ其「ナリ」ンク井子マレノ地等ハ其氣候融和十

ル印度ノ諸國ニ冠タリ故ニ土地極メテ肥饒ニシテ物
産克溢セリ安シ以テ世ニ或ハ此地ヲ以太古ノ^バラテイ
ス^{準及ノ}地ニシテ多ク人ノ始祖亞當ノ遺址アリト云
ヘリ猶下ニ記ス

此地ノ諸樹木終年恒ニ緑ニシテ赤米ヲ産ル極メテ夥
シ故ニ其馬ノ如キモ恒ニコレヲ畜フニ米ヲ以テセリ其
他生姜胡椒紅花及諸ノ香葉ノ類ニモ夥シク殊ニ其肉桂
ノ夥キヲ勝テ言フベカラス安ヲ以テ和蘭ノ人コレヲ取
リテ其本国及他邦ニ輸ス一年々限ナシト雖モ敢テ減セ
ズシテ或ハ薪ト為スニ至ル海上ヲ航行スル者此島ニ近

ツク一二三里ニスレバ即肉桂ノ香ヲキ、テ因テ岸ニ近
キヲ知ルト云其他葡萄無花草石榴橙橘香櫛沙糖烟草密
及種々ノ諸菓モ亦夥シ
又夜光寶石猫兒眼サツヒイレントハアセン等諸寶石多
シ惟金剛石ヲ産セス金銀モ亦多シ然レ氏此島ノカンテ
イノ国王ヨリ嚴禁アリテ金銀ノ二種ヲバ外国ノ人ニ交
易セシメス

獸畜モ亦多シ其産スル所ノ象ハ形容最美ニシテ且猛力
勝レ又極テヨク人ニ狎ル故ニ世ニ相傳フ他國ノ象モシ
此國ノ象ニ過ヘハ即蹲伏スト然レ氏コレハ寓言也此國

ノ象ハ他ノ諸国ノ産スル所ノ象ニ比スレバ大ニ勝レタ
ルニ因テ此言ヲ為スノミ

其土人ハ種類一十ヲス其古ヘノ世ヨリ此島ニ居ルノ土
人ヲバシンガレルス又シンガレエセント名ク又一種ノ
此島ノ「カルベ」ンテイ「ン」ノ地ノ西南海岸ヨリシテ「マ」チユ
レノ地ニ迄ク「ドン」テンノ地ノ边ニ至ルマデノ間ニ居ル
ノ人ハ多クハ麻辣襪ルノ人ノ種ニシテ其言語風俗トモ
ニ皆麻辣襪ルニ同クシテ他ニ異也此二種ハ人ハ共ニ浮
屠ヲ尊ミ其教ヲ奉ジ其性愚陋也又其海边諸城地ニ居ル
人ハ馬哈默ノ教徒及波尔杜瓦儿和蘭等ノ人也

古ヘヨリ此島ニ居ル人ノ種類ハ其形軀ハ宜キニ適フト
雖モ面貌甚醜黒ニシテ其風俗モマタ淫蕩野賤也

此島中ニ亞細亞洲中ニ於テ最有名ノ高山アリ名テ「ピ」コ

ト云フ其高キ拂郎察国ノ里法ヲ以テコレヲハカルニ凡

七里拂郎察国ノ里法凡三等アリ小里法ハ三十里ヲ以テ
地ノ緯一度トシ大里法ハ二十里ヲ以テ地ノ緯一度

トシ尋常ノ里法ハ二十五里ヲ以テ地ノ緯一度トセリ即
此ニ所言ハ蓋シ尋常ノ里法ナルベシ

馬哈默ノ教徒ノ曰人始祖亞當生レテ此ニ居リ歿シテ此

ニ葬ルト故ニ此山ヲ名テ「ア」タムスヒイキト云其頂上湖

アリ其水鹹シ曰コレ厄襪ノ涙ニ因テ此湖ヲ成スト按ス

西洋諸国ノ古説ニ曰太古ノ世ニ造物主天地ヲ造有シテ
乃リテ後ニ人ノ始祖男女二人ヲツクリテ己ニハラデイ

スノ地ニヤク其男ヲ亜當ト云ヒ女ヲ厄祓ト云又明人ノ諸説ニ此国ノ高山ノ上ニ盤古ノ遺址アリト又曰此山ニ五色石アリコレ盤古ノ淚結ムテ成ル処ナリ杯アル者コレニシテ此盤古ト云者ハ則西當ヲサシテ云者ナルヘシ按ルニ佛曰靈鷲山ナリ則意蘭島トマチユラノコロマンテルノ

地ノ間ナル海峡ノ中ニ沙渚アリテ両地ニ連且セリ此渚上只小船ノミ往來スヘシ此沙渚ヲ呼テ亜當橋ト云相傳ヘコレ古ヘノ時亜當ハラテイヌヨリシテ爰ニ渡リタルナリト

古ヘノ世ニ浮屠ノ徒此アダムスヒイキノ山ヲ称シテ大聖ノ遺蹟トシ此ニ祠廟アリテ一ノ金獼猴ノ牙ト稍スル者ヲ納ヌ貯ヘテコレヲ尊崇シ遠近ノ行者教徒皆此ニ詣

テ々礼拝供養ヤシガ其後波ル杜瓦尔国ノ人此地ニ台撰

セル時ニ悉ク其祠廟ヲヤブリ毀テ彼獼猴ノ牙ヲモ碎キ

テ塵ト為セリ此獼猴ノ牙ト称スル者諸書ヲ合セ考ルニ蓋シハ舍利類ヒナリ按スルニ昔シ印度ノ

地ニ一種ノ白キ獼猴アリ其人コレヲ尊ミテ神トセリ則意蘭島ニ於テ只其牙一枚ヲ貯ヘテ神トシ祭ル後ニ波ル

杜瓦尔ノ人印度諸国ノ王所藏ノ諸宝物ヲウハイ聚ムルニ及ンテ此牙モ其中ニアリ黄金ノ櫃ニ納メ封スルニ香

泥ヲ以テシ神像ヲ其上ニ彩画セリ而ノ琵琶牛国ノ王ヨリ無歲好ヲ通スルニ及テ琵琶牛ノ王其神牙アルヲ聞テ則

黄金三十万ヲ船ニ積ミテ波ル杜瓦尔国ヨリヲ所ノ大酋コンスタントノスニシテ波ル杜瓦尔神牙ヲ乞フウンスク

ンテノス曰彼牙何ノ神矣カアラント則衆ヲ會シ彼使者ノ前ニ於テ金櫃ヨリ其牙ヲ取出シテ皆足ヲ以テコレヲ

フミ次テコレヲ銅ニテ造レル白ニツイテコレヲ碎キ又コレヲ火ニ投シテ烟塵トナセリト云フ

此祠廟ヲ毀テ得ル処凡七十万チユカアリニ當リシト云

千ユカアトハ金錢ノ名一ヲ以テストイヘルト云重サニ
分ナル小銀錢ノ一百箇ニアタル

世ニ或ハ此則意蘭島ヲ以テ古ヘノ世ニ所謂大波巴那ノ

地ナラント云按ルニ今ヲ去ル一十七百年前ニ既入
多田ノ字師フトロノウスカ著セル万国

ノ國ニ印度ノ南海ニ大波巴那ト云ヘル大島ヲ載世ニ或

ハ今ノ則意蘭ナラシ云也又ハ多クハ今ノ蘇門答刺ナ

ラシ云フ猶又ハ古ヘ撒刺滿王ノ時ノオヒル國ナラシ

氏云ヘリ撒刺滿及オヒル國ノ事上ノ印度志ノ中ノ琵琶
及滿刺加ノ条ニ記セリオヒル國ノ地今詳ナラ

異説アル者ナリ

此島ヲ今分テ三大國トナセリ其北方ノ尖レル地等ニア

ル者ヲワシ子イ國ト云コレ一種ノ別國ニシテ其ノ土人

ヲ称シテウエツタス又ベツタストモ云コレ國王ナク只

諸酋相聚リ和シテ其國ヲ治ムル者也又其中尖ナル幅廣

キ処ニアル者ヲカントイ國ト云フコレ一ノ國王アリテ

コレヲ治メ世ニ或ハコレヲ帝國氏称セリコレハ自立ノ

主ニシテ数多ノ属部酋長アリ其國都モ亦カントイト云

海ニ遠キ内地ヨリシテ其東南ノ海邊カチヤルノ地及ワ

リエウエ河ノ邊ニ至ルマテノ間ヲ領ス又其西南ニアル

ノ諸地ヲハカ子エルラント云肉桂諸國ト云フ
云フ義ナリコレ其地

ニ肉桂ノ大林アルニ因テ名ケタル者也

此島波尔杜瓦爾國ノ人始メテ爰ニ至リテ其土人ト貨物

ヲ交易シ彼ノ古ヘノ女王チドガカルタゴノ城ヲ築キタ

ル故智ヲ用ヒテ其土人ヲ欺キ牛皮ノ覆ニ足ルノ地ヲ乞
 ヒ求メテ遂ニ其大地ニ披リ一千五百零五年日本永正二
 年明弘治十
 ハニ崑崙勃ト云ヘル城郭ヲキスキ昔テイリユス国ノ女
 王デドナル者亜弗刊
 加ニ至リテ其土人ニ金室ヲ与ヘテコレニ親ミ請テ曰願
 クハ一牛皮ヲ以テ覆ウニ足ルノ地ヲ与ヘヨト土人コレ
 ヲ許セリ女王則衆ニ命シテ牛皮ヲ細ク載テ線トナシコ
 レヲ以テ多クノ地ヲ囲ミ環ラシ遂ニコレニ披テ要害堅
 固ナル城ヲキスキテカルタゴト名ケコレヲ根本ノ地ト
 シテ次第ニ其辺ノ諸州ヲ併セ有テリコレ日本神武天皇
 ノ元年辛酉ヨリ以前ニ百零八年ノ事ニシテ唐土周ノ厲
 王ノ十一年癸子ニ當レリ按ルニ明史及東西洋考仏郎機ノ
 人呂宋ヲ奪フヲ記シ鄭成功傳ニ和蘭ノ人臺灣ニ披ル
 下ヲ記セリ皆牛皮ヲ以テ其土人ヲアガムキト也コレ
 皆此ニ云女王ヲトカ故然レ凡其後「カンデイ」ノ王ト勢ヲ
 智ヲ字ヒタルト見タリ然レ凡其後「カンデイ」ノ王ト勢ヲ
 第フニ因テ戦ヲ交ユル下連年止ム時十カリシガ一千六

百一十二年日本慶長十七年「カンデイ」ノ国王和蘭ノ人

ト好ミヲ結ヒ重賂ヲ遺リ和蘭ノ援ヲ得テ共ニカヲ合セ
 テ波尔杜瓦尔ノ人ヲ追出サントシ謀リテ和蘭ノ人ト共
 ニ波尔杜瓦尔ノ人ヲ攻テ戦ヲナシ而ノ此時和蘭ノ本国
 ニテハ以西把尼亞國ト連年戦アリ且波尔杜瓦尔國コレ
 ヨリ先ニ其王ニツキナクシテ以西把尼亞ニ内属セルニ
 因リ波尔杜瓦尔國ニ嗣ナクシテ六十年カ間ハ国王ナク
 シテ以西把尼亞ニ内属シテ後又先王ノ苗裔ヲ立テ
 王トナル下波爾杜瓦尔以西把尼亞ヨリ又波尔杜瓦尔ヲ
 十ヲ其条下ニ記ス
 援クルヲ以テノ故ニ数年カ間此国王及和蘭ノ人皆散テ
 其志ヲヘガリシガ一千六百三十二年日本寛永九年
 明崇禎五年ニカ

ンテイノ新主ラクシニガナルモノ其父ノ位ヲ嗣ゲ王ト
 十リ又新タニ和蘭ニ好ミヲ厚クシ誓シ結ブニヨリ一千
 六百三十八年日本寛永十五年 明崇禎十一年ニ瓜哇ニ所置ノ和蘭ノ鎮
 府ヨリシテ海軍ノ大将ウエステルウオールドナル者大艦
 五艘ニ駕シテ此ニ来リテ戦ヒシ為シ屢波尔杜瓦尔ノ人
 ヲ破リコレヨリシテ後二十年ガ間絶ヘス戦アリテ和蘭
 ノ人遂ニ戦ヒ勝テ波尔杜瓦尔ノ人所領ノ此国処々ノ城
 地ヲ悉ク奪ヒ取テ己レカ有トナシテ皆守兵ヲ置キカン
 テイノ王モコレニ因テ其国数十年来ノ戦争止ミテ土人
 スベテ安キヲシ得タリ

然レ凡和蘭ノ人悉ク波尔杜瓦尔人ノ地ニ拠テ其勢盛シ
 ニ地ヲ廣ク諸ノ肉桂ノ大林皆独リ其利ヲ占テ土人ニ命
 シテ堅ク他国ノ人ニ肉桂ヲ鬻賣クヲ禁セリコレニ因テ
 又カンテイノ王ト睦シカラズシテカンテイノ人衆ヲ集
 ノテ和蘭所領ノカ子エルランデンノ地ヲシカシヘル
 時々コレアル和蘭ノ人又守兵ヲ処々ノ要害ニ置テコレ
 ヲ拒キ戦ヒテカンテイノ人敢テ勝ヲシ得ズ其後カンデ
 イノ王ラヤシンガ卒シテ其嗣王立ツニ及テ和蘭ノ人ト
 和睦ヲ講シ誓約ヲナシテ其封疆ヲ定メコ子ヤルノ地ヨ
 リシテワリエウエ河ノ边ニ至ルマテノ処ヲ以テ界トナ

シテ國中又大平也此和蘭所領ノ地ハ長ク海辺ヲ環リ其幅ハ狹キ所ハ十里日本ノ廣キ所ハ十二里日本ノ二十四里日本ノニ及ヒテ頗ル廣大也

和蘭ノ人此地ニ拠テ生産ノ利ヲトロノ并ニ國人ト交易ヲ為テ其肉桂ノ如キ毎年和蘭ノ本國ニ送ル者四五十万以テ一介ト為ス其他米及紅花錫及諸種ノ香茶ノ類ヒ得ル所極テ夥シ又山林ニ於テ象ヲ捕ヘ得テ他ノ印度諸國ニ交易セリ其象ノ大小ニ因テ一隻ノ價五百ギユルテンヨリ八百ギユルデン以テスルトイヘルト云ヘル重リ二分ナル小銀錢ノニ至ル也

和蘭人此海辺ノ諸地ヲ有ツ者ニハサマエトマシム

崑崙勃ハ西方海辺ニ在テ壯麗成地也コレ一千六百

五十六年日本明曆二年 清順治十三年ニ和蘭ノ人大ニ波爾杜瓦人

ト戦ヒ其城ヲ破壊シテ是ヲ奪トリ次テ又大ニ修造

ヲ加テ要害ヲ固シ其城ハ五角ノ形ニ是ヲ築ク是此

島中ニ於テ和蘭第一ノ府トシテ此島ヲ治ムルノ總督是

ニ居リ多学校ヲ立テ幼童ヲシテ諸ノ法教言語及文

学諸藝ヲ講習セシム

子コムホハ小府也ト雖モ城地堅固ニシテ又ヨキ港ア

リ此処ハ和蘭ノ人一千六百四十四年日本正保元年 天明宗禎十七

年以テ是ヲ奪ヒトリ此府ノ周圍ニ多肉挂ノ林アリ
シラフ又小府ナリ此府ノ名ニ因テ其傍ニ有海峡ヲモ
名テ又シラオノ海峡ト云

マナアルハ一ノ小島ノ上ニ造建シテ堅固ナル城池ナ

リコレ一十六百五十八年日本万治元年ニ和蘭ノ人

波亦杜瓦ルヲヤフリテコレヲ奪ヒトリ此邊昔ハ多
ク真珠ヲトリシカ今ハ稍少シ

此他北方海岸ヨリ西方海岸ニ近キ数多ノ小島アリ和
蘭ノ人皆己レカ本国ノ地名ヲ以テコレテ命セリ郎
チレフトホオルンエンキホイセンレエイテンアム

ステルダム等也

ハムノンヒイルハ昔ハカイスト名ケリ堅固ナル若ク

構ヘテ四方皆水ニ臨ミコレヲ以テヤツフナハタン

ノ港ノ固メトセリハムノンヒイルトハ豚ノ臘乾肉

ノ踵ト云義ニシテ和蘭ノ人則意蘭島ヲ臘乾肉ノ

形ニ譬ヘ此地ハ其臘乾ニテイハ々踵ノ処ニアタル

ヲ以テ名ケタル也

ヤツフナハタンハ則意蘭島ノ北方海中ニ尖出シタル

地ニ在テ其府ハ廣大壯麗ニ其城ハ甚堅固ニ人居亦
多シ然レ氏府外ニハ郭ヲ設ケズコレ一十六百五十

六年日本明曆二年 清順治十三年ニ和蘭ノ人コレヲ攻取レリ此処

ヨリコロマンデルノ地ト夥シク貨物ヲ交易セリ此

地モ亦学校ヲタテ々幼童ヲ教導スルノ崑崙勃ノ府

ト相同シ

チリンカマレ又チリンク井ニマレトモ云コレハ東方

ノ海辺ニアリテ其辺ニ大湾アリ又チリンカマレト

名クコレ壮麗ナル府城ニシテ其地勢ノ堅固ナルニ

依リコレニ人エヲ加ヘテ造建周密ニ要害最ヨロシ

コレ一十六百三十二年日本寛永九年 明崇禎五年和蘭ノ人コレ

ヲ攻取レリ

ハツテカラオハ亦東方ノ海辺ニ在テチリンカマレノ

南ニ當リヨキ城池ヲ構ヘハツテカラオト云ヘル小

河ノ口ニ在リ此地一十六百三十八年日本寛永十五年 明崇禎九年

ニ和蘭ノ海軍ノ大將ウエステルウオルトナルモノ

戦艦ヲ泛メ此ニ来テ攻取レリ

チンガレハ一城池ニシテ地ニ湾アリ又チンガレト名

ク則南方ノ海辺ニアリテ此辺ニテ多ク象ヲ捕フ

マチユレハ南方ノ海ニ尖出シタル地上ニアルノ城池

ニシテ便利ナル港アリ此港ノ辺ニモ一ノ岩ヲキス

イテ要害ヲ嚴ニセリ

カレ一名ピユントガレト云又南方ノ海辺ニ在テマチ
ユレソ西ニ當リ一ノ岩石聳ヘタル高キ処ニ城ヲカ
マヘリコレ一千六百四十年日本寛永十七年
明崇禎十一年ニ和蘭
ノ人兵ヲ以テ急ニ襲ヒテ攻取レリ其未崑崙勃ノ地
ヲ得サル以前ニハ和蘭ヨリ所置ノ此嶋ノ總督焉ニ
居リシ也

カリチユレハ西南ノ海岸ニアリテ堅固ノ地也一千六
百五十五年日本明暦元年
清順治十二年ニ和蘭ノ人コレヲ奪ヒ取
リニ善キ島ヲ海峽ニ對シテ置テ和蘭ノ人ニ居ルコト
コツタハ崑崙勃ヲ去ル一遠カラズコレハ海ヲ離レタ

ル処ニ在リ

以上皆和蘭ノ所領ノ地也

カンテイ國ノ王都モ亦カンテイト云コレ則意蘭島ノ
中央ニ在テ子リンク井マレト云ヘル河ニ傍ヒ廣大
ニシテ造建壯麗ニ此島中ニ於テ第一ノ繁華富盛ノ
地ナリシガ曾テ一夕ニ波ル杜瓦ルノ人ニ破ラレテ
此都ヲ放火烧亡シテヨリ今ハ大ニ昔ニ及バズト云
フ
シユングノ諸島ソングノ諸嶋ト云

允蘓門春刺嶋ト瓜哇島トノ間ノ海峽ヲ世ニ名テシユン

タノ海峡ト云フニ因リテ則其辺ノ諸島ヲ總稱シテシユ
 ンタノ諸嶋ト云其コレヲシユンタノ海峡ト稱スル者ハ
 此峽ノ形勢恰モ歐羅巴洲ノ窩々所徳海ノ傍ナルシユン
 トノ海峡弟那瑪尔加国ト雪際亜国ト云ノ如クナルニ因テ名
 クル者ニシテ歐羅巴ヨリ支那及日本ニ赴クノ海船滿刺
 加峽ヲ過ギル者ハ皆此シユンタノ海峡ヲ過クル也
 シユンタノ諸島其数甚多ク而ノ其内ニ小ナル者ハ多ク
 ハ詳ナラスシテ且記載スルニ足ルノ事状ナシ又其最大
 ナル者三アリコレハ模門答刺瓜哇波耳匿何ニシテ則次
 ニ記セリ

凡此諸島ハ氣候大抵不順ニシテ他邦ノ人至ル者多クハ
 コレヲ患フ且其毎日常用撰生ニ供スベキノ物ハ多クハ
 不足ニシテ皆他邦ヨリコレヲ輸送セリコレハ歐羅巴ノ
諸品物ヲ以テ此然レモ種々貴重スベキノ諸物品ハ極テ
說ヲ掲ク 夥シクシテ皆コレヲ歐羅巴洲ニ輸送セリ

模門答刺

此大島ハ滿刺加ノ海中ニ尖出シタル大地ニ相對シテ其
 間狭キ海峡ヲ以テ其界ヲ分ツコレヲ和蘭ノ人ハスタラ
 アトハン、マラツカ滿刺加ノ海峽ト云ヘル義ト云ヒ以西把尼亞国ノ
 人ハエステレフ、ゲシンガ互ラヘルシカト云ヘル義ナリシノ海峽ト云

ラハ滿刺加ノ東南若甘国ト云此海峡ノ中ニハ数多ノ小
ノ辺海ノ地名ナリ
島アリテコレニ充滿セリ

此島甚大ニシテ入ル馬泥亞国ノ里法ヲ以テコレヲ則ル

ニ其長サ二百三十里日本ノ四百六十里其幅ハ四十里日本ノ八十里或ハ

五十里日本ノ一百里ニ至ル其大サ大抵諸厄利亞ト思可香亞ノ

兩國ヲ合セタルカ如シ其東方沿海一帯ノ地ハ皆最富饒

ニシテ諸物産充滿セリ又其中央赤道直下北ニアタルノ

地ハ氣候極メテ熱スト雖モ昼夜ニ涼風絶ヘザルニ因テ

人稍其生ヲ聊スベシ其霖雨ノ如キニ毎ニ六月西洋ノ六月

ノ小滿ノ十日或ハ十一日比ヨリノ初メヨリシテ十月ノ西洋

月ハ此方ノ秋分ノ十日又ハ十一月ノ末ニ至ル也

允此島ハ氣候稍和スト云ノ時節ト雖モ他ノ印度諸國ニ

比レバ最不煩ナリトスル其諸池沼ノ如キハ熱氣ニ煎熬

セラル、ニ因テ其水皆烟ヲ發シテ瘴毒ヲ生スル殊ニ其

西方海岸ノ地ヲ最甚シトセリ故ニエリアスヘツセト云

人ノ印度紀行ノ書ノ第六篇ニ此西方海邊ノ地ヲ称シテ

疫渚ト云ヘルモ亦宜ナリ其他雷電狂風暴雨ノ類ヒ甚多

ク又地震多キカ故ニ国人多クハ土石ヲ以テ家ヲ造築ス

ルヲヲナセリ只木ヲ以テコレヲ造テ以テ地震ニ因テ鎮

壓セラル、一ツニハ此地ハ造築ヲナスベキ

ノ石モ又稀少ナルニ因テナルベシ
此島中最多キ所ノ者ハ米稗沙糖生姜菓葵胡椒香椽橙橘
香桂元腦安息香及貴義ナル絹帛等也

又其金銀鉛鉄等ノ如キモ甚多クシテ只山中ヨリコレヲ
出スノミニアラス河水ノ中ヨリモ又コレヲ採ル其獸類
ニハ出ス所ノ象及犀モ亦甚世ニ名アリ

此島ニ居ルノ人ハ又他ノ印度ノ諸島ニ同シク其種類凡
ニ品アリ其海ヲ離レタル内地ニ居ル者ハ則古ヘヨリノ
此土人ノ種族ニシテ多ク浮屠ノ教ヲ奉ジ又其海邊ニ居

ル者ハ亞刺比亞百兒西亞等ノ諸国流寓ノ徒ニシテ皆馬
哈默ノ教ヲ奉スル也
其人總ヘテ黒色ニシテ風俗賤ク大抵懶惰傲慢妬忌不睦

ナリフクヲ以テ閩第ヲ生ジテ一千六百五十九年日本万
治二年
清順治十二年和蘭ノ人一千七百一十九年日本享保四年
清康熙五十八年

諸厄利亞ノ人ト相戦ヒテ土人大ニ殺傷セラレシ事アリ
其事並ニ下
ニ出ルナリ

此島中ニ数多ノ國王アリ各其地ニ拠リ自立シテ相一統
セズ然レ凡近來ハ其北方ニアル処ノ亞齊国ノ王勢最盛
ニシテ他ノ諸国ノ王多クコレニ服属セリ故ニ今ハコレ
ヲ蘇門答刺ノ帝者トモ稱スルニ堪ヘタリ

諸厄利亞ノ人此島中ニ居処ヲ構ヘテ交易ヲ為シテ欲
スルニ因テ一千六百年日本慶長五年明万曆二十八年ノコロホヒニ諸

厄利亞ノ女王エリサヘトヨリ加比丹ランカステルヲ使

トシテ唾吞ノ王ニ書ヲシクリテ交易ヲ通センコトヲコフ

亞齊ノ王コレヲ許シテ互ニ約ヲナシコレヨリ諸厄利亞

ノ人自在ニ互市ヲナシテ大利ヲ營ミ今其西方海岸ノ処

処ニ商館ヲ置ケリ

和蘭ノ人モ亦此ニ到リ海辺ニ処々ニ堅固ナル城砦等ヲ

構ヘ一千六百六十六年日本寛文六年清康熙五年ヨリ一千六百八十

八年日本元禄元年清康熙二十七年マテノ間ニ次第ニ繁昌シテ西方海

辺シツレバルハロス等ノ地マテモ交易相通セリ其後諸

厄利亞ノ人モ亦次第ニ地ヲ開キテ南方ノ海辺ニモ到リ

和蘭ノ人此ニ到リテヨリ其勢ニ日ニ盛ニシテ或ハ自ラ

城地ヲ処々ニ築キテ其地ヲ治メ或ハ其国王ヲ降シテ和

蘭ノ属トナシテ其地ヲハ其王ニ治メシメテ只其賦税ヲ

収メ或ハ其国王ト好ミテ結ビ約ヲナシ商館ヲ置テ交易

ヲナスモアリテ種々物貨ヲ得ル極テ夥シク而シテ此島

中ノ処々ノ事務ヲ總管スルノ大酋ハバダンクノ地ヲ以

テ鎮守府トスル也

和蘭ノ人此島ニ於テ第一ニ所收ノ物ハ則胡椒ニシテ毎
年其土人ヨリ定額ノ数アリテコレヲ和蘭ノ酋長ニ輸
スル而ノ其土人ノ内ニテ或ハ胡椒ノ数不足ナル者ハコ
レヲ代フルニ綿布ヲ以テシテ其定額妄サス其他モ亦多
ク金銀銅瓦腦蜜蠟等ノ類ヒヲモ收ム此島中ニ於テ著キ
ノ地ハ

啞香又アシイン又アセントモ云コレ王国啞香ノ都ニ
シテ此大島ノ最北隅ニ在テ平坦ノ地ニ造建シ一ノ
河水ニ臨ム此河ハ只小舟ヲ以テ往来スベシ此国王
及群臣皆馬哈默ノ教ヲ奉スル其領スル地ハコレヨ

リ南ニ連直シテ又西北海邊諸島マデニ距ル其諸小
島ノ内ニ著キ者ハ「ラウレワイ島」也凡啞香ノ都ハ其
周囲ニ惶及封疆等ノ要害ナシ然レ氏此都ノノクリ
ニ河水沼沢及大林等アルニ因リコレヲ倚ミテ險ト
ナシテ都テ沼沢ニ傍テ造建シテ以テ不意ニ備ウナ
リ其人家ハ皆高ク造建シテ地ヲ去ルヲ九尺或ハ一
丈ニ及フコレ毎年水出テ此都内ニ溢ル、ヲ防グカ
為也其屋ハ皆椰樹ノ葉ヲ以テコレヲ覆フ王ノ所居
ノ城ハ墻ヲキツイテコレヲ環ラシ造営宜ク四邊ニ
砲ヲ列置シテ其備ヲ嚴ニシ都内街衢ノ外邊出入ノ

口ノ如キモ亦皆守備ヲシキ商賈倭會シテ殊ニ支那ノ人多ク此ニ距リテ定例ノ互市ノ日ニハ夥ク諸ノ貨物ヲ貿易セリ諸厄利亞ノ人モ亦此ニ來テ交易ヲ十セリ曾テ一千六百一十六年日本元和二年明二西番ノ王軍士六万人戰艦二百艘蜈蚣船六十艘ヲ備ヘ海ニ泛ヒ波尔杜瓦人拠リシ所ノ此島ノ「バセム」ノ地ニ攻來リコレヲ追出セシト在
又此島ノ西方海邊諸厄利亞ノ人居ル処ノ地ニ「ハル」シツラハルハ南極出地三度二十八分ニ當リテシツラハルト云河水ニノソム此地一種ノ短劍ヲ治ス名テ

キリツチユント云其利キコ印度諸国ノ最トセリ此地

一名スシツレバルトモ云フナリ

「マルバブウルグ」ハシツラバルニ近クシテ小ナリト雖

モ堅固ノ城地ナリ一千七百二十年日本享保五年清康熙五十九年

ニ諸厄利亞ノ人コレヲ築キリ

「ヘンコン」一名「ベンクウレント」ト云シツレバルノ北行

程九五時此方ノ二時半ナル処ニアリコレ一千六百八

十八年日本元禄元年清康熙二十七年ニ和蘭ノ和睦アリテ後ニ諸

厄利亞ノ人此ニ堅固ナル城ヲ築キテ「ヨルク」ト号ス

然ルニ一千七百一十九年日本享保四年清康熙五十八年ニ比土人

一夕に諸厄利亞ニ叛キテ衆ヲ聚メテ其所居ニ火ヲ
放テコレヲ攻シガ諸厄利亞ノ人軍ヲ以テ追討シテ
悉クコレヲ平治セリ

此他西方海辺ニ諸厄利亞人所居尚イツアウカツトウ
ンバンタルモコモコ等ノ地アリ

又此島ノ西方海辺ヨリ北辺ニ距ルマテノ間ニ和蘭ノ
人居ル処ノ地名ニハ

インダポウル一名インダラポウル凡云南極出地ニ度
ニ當ル

シウリダハイインダポウルノ地ヲ去テ遠カラズヨキ郭

ヲ構ヘリ其傍ノ山中ニヨキ金鑛アリ和蘭ノ人コレ
ヲ採ル

ポヲロシニコハシツリダノ海岸ヲ去ルテ四半時日本ノ半

時ナル一ノ小島ニシテ周廻凡半里日本ノ一里 此処ニ和

蘭ノ人府庫ヲ置キ且小ナル砦ヲ築テ其要害ヲ固ク
セリ

マナンカポハ王国マナンカポノ都ニシテ其王所領ノ

地頗廣シ和蘭ノ人コレト好ミヲ結び約ヲナシテフ
コニ居住シ此土ヨリ黄金ヲ貿易シテコレヲ得ル也

バダングハ海ニノソムノ城地ニシテ和蘭ヨリシク処

ノ此島ノ庶務ヲ總ヘ管トルノ大酋コ、ヲ鎮守スル
ナリ

此他「フリアマ」ニ「テコウ」
「パツサマン」
「アヂユル」
「バチヤ」
「ハ
ロス」等ノ地和蘭ノ人皆コレニ商館ヲ置ク

又此島ノ東方海邊ヨリシテ北方ニ距ルノ間著キノ地ハ
「ペキル」ハ王国「ペテル」ノ都ハセムハ王国「ハセム」ノ都「テ
レイ」ハ王国「テレイ」ノ都ニシテ昔ハ皆別国ナリシガ

今ハ總ヘテ啞吞ノ王ニゾクセリ
右ノ三国ヨリ南ニ當リテ「アンタラガリ」
「ヤムビイ」ノ二
城池アリ共ニ和蘭ニソクス則和蘭ヨリ商館ヲ建置リ

「パリンパン」ハ王国「パリンパン」ノ都ナリシガ一千六百

五十九年日本万治二年清和蘭ノ人大ニコレヲ破

掠シテ殺戮スル者多ク其貨物ヲ收メテ般ニツミ去

レリ按ルニ一千六百五十八年和蘭ノ商賈二人小

赴キシ者ヲ此國ノ人コレヲ殺シテ其貨ヲ奪ウ其事

瓜哇ニ聞ヘタルニ因テ一千六百五十九年ノ十月ニ

瓜哇ニ所居ノ和蘭ノ大酋ヨハンマアチユイクル率

シテ其海軍ノ大將ヨハンバンテルテアン副將ヨハ

ントロイトマンズ加比丹ハルマン等ヲシテ大般十

一艘及教多ノ軍船ニ駕シテ此國ヲ伐ツテ屢戦ニ勝

テ此年十月遂ニ其都城ヲ攻破リテ其宮殿ヲヤキ同

王ヲ走ラシメ其大酋數十人ヲ擒ニシテ皆コレヲコ

ロシ其府庫ノ宝貨ヲ收メテ十二月三日ヲ以テ凱ヲ

奏シテ瓜哇ニ帰帆セリ其事詳ニニイウホフト云人
ノ東洋紀行 其後和睦ヲナシテ今此國王ハ和蘭ノ属
ニ見タリ

トナリテ其命ヲ奉シ約ヲナシテ胡椒及ヒ種々ノ物
品ヲ貢セリ毎歲此国ヨリ和蘭ノ此島ノ總管府ハ夕
ンクノ地ニ輸送スル所ノ貨物大船凡五六艘ナリ凡
此都ハ宏大壯麗ニ王ノ宮殿モ亦其規制美麗ナリ都
ノ傍ニ河アリ又「ハリンパン」ト名ク其河口ニハ商船
輻湊セリ

「ハリンパン」ノ地ニ對シテ「バシカト」云島アリ一ノ狭キ
海峡ヲ以テ「蘓門答刺島」ト其畧ヲ分ツ按ルニ此海峡ヲ
名テ「ハシカト」云
「ハタヒア」ヨリシテ滿刺加琵琶暹羅等ノ諸国ニ赴
ク船ハ皆此海峡ヲ過ルナリ

蘓門答刺ヨリ西北ニ當リテ榜葛刺海湾ノ内ニ向ヒテ尚數
多ノ小島アリ今爰ニ附録スル

其蘓門答刺ニ近キ者ヲ「ニエバルス」ノ諸島ト云北極出
地六度ヨリシテ十度ニ距ルノ間ニアリ此諸島ノ内
ニテ一ノ最大ナル者ヲ「ニコバル」ト名クコレニ因テ
此邊ニ近キ諸小島ヲ總稱シテ「ニコバル」ノ諸島ト云
ナリ

此諸島政羅巴ノ人敢テコレヲ占拠センコトヲ欲セズ
其土人ハ浮屠ノ教ヲ信シ言語ハ滿刺加ニ同シ敢テ
他邦ノ人ト商賈交易スルノ事ヲモ深ク通曉セズ只

適ニ他邦ノ船其島邊ニ泊スルヲアレハ則其産スル
所ノ豕ノ諸島ノ椰子ノ類ヲ携ヘ来リテ他ノ物ニ換
ンテシ求ムルニ過キサルノミ

ニコハルス諸島ノ北ニ當リテアングマンノ諸嶋アリ
テ北極出地十一度ヨリシテ十四度ノ間ニ散在セリ
コレモ其内ノ最北ニ當リテ最大ナル者ヲアングマ
ント云ニ因テ其邊ノ諸島ノ總名トスルナリ其土人
ハニコハル島ノ人ニ比スレハ甚強暴ニシテ馴レ親
シムヘカラス好ンテ人肉ヲ食ヒ他国ノ船コ、ニ到
レハ毎ニ其船ヲヤフラントセリ船人コレヲ追ヘバ

則走テ島ニ上ル故ニ海船爰ニ泊スル者ナシト云フ

按ルニ此島ハ蓋シ事林廣紀三才圖會等ニ云日安院
寮国ナラン其音及其俗ヲ紀ス所同ナレハナリ

瓜哇島

此島シユンタノ海峡ニ臨ミ其長サ一百五十里日本ノ幅
三百里

ハ三十里日本ノ六
十里世ニ亦此島ヲ大瓜哇ト称シテ以テ其

近傍ノ小瓜哇ト称スル島ニ區別セリ而シテ其小瓜哇ト称

スル島ハ何ノ島ヨリト云フ頗ルサタカナラス然レ凡世

ニ多クハ云小瓜哇トハハレイ島ノ別名ナリトハレイ島

ハ此島ノ東ニ當リテパランバント云フ海峡ヲ以テ其界

ヲ分タル者ナリ而シユリウススカリゲル意太里亞国
勿搦奈里ノ

人ニシテ文武大才アリハル馬泥亞ノマキシミアンカ
アレル諸帝ニ仕ヘテ屢々軍功ヲ立テ高官ニ擢奉セラレ
天文地理医茶法教政治軍旅風鑑詩章等ノ学其蘊奥ヲ究
ノサルハナシ世ニコレヲ貴ミテヒ如ソオワト称セリ則
大賢ノ義ナリ著ス所ノ書甚多シ一千五百ノ著ス所ノ万
五十八年ヲ以テ卒セリ寿七十四歳ナリ

国畧誌ニハ小瓜哇ト称スル者尚他ニモコレアリ按スルニ

ウホワハレンテイ等ガ東洋紀行ニハ皆小瓜哇ヲ以テ
ハレイ島ノ別名トセリ又ウエルンテレント云人ノ滿刺

加字学ノ書ニハシユムバワ島ノ別名ヲ小瓜哇ト号スト
シユムハワモ亦大瓜哇ノ東ニ當リテハレイ島ト其隣相

近シ又曰古ヘノ世ニハ今ノ蘇門答刺ノ南
邊ノ地ノモ小瓜哇ト号セリ

此島其氣候ハ蘇門答刺波耳匿何ノ二島ニ比スレハ大ニ

安和ナリトスル其地ノ幅ハ南極出地六度ヨリ九度ニ距

ル土極テ肥沃ニシテ物産極メテ夥シ而メ其中ニ最名ア

ル者ハ胡椒及安息香也山香里亞

其他夥シク諸金及諸ノ香茅ヲ産セリ又一千六百余年ノ

比ヨリシテ亞刺比亞国ヨリコツヒイ樹ヲ移シ植ヘテ次

第ニ其種増殖繁茂シ今ハ此島ノ北方海邊ニハコツヒノ

一樹長キ林ヲ為シコレニ因テ毎歳此樹ヨリ採ル所ノ豆

一千余斤ヲ欧羅巴洲ニ輸送セリ此処ヨリ出ル所ノコツ

ヒイ豆ハモツカ亞刺比亞国ノ中ヨリ出ス所ノ者ニ亞ギ

テ上品ノ部ニ入ルヘシコツヒイ樹ニ結フ所ノ実ノ仁ハ

スルモノ其形豆ノ如シ西洋ノ人毎日服用

此地他ノ諸穀ヲ産セズ惟米ヲ出ス一極メテ夥シク土人

毎日煮テコレヲ食スル_ト恰_ト我邦_{西洋}ニテフロオトヲ

用ユルガ如シ_ヲフロオトハ麥餅_{ナリ}改羅巴諸国ノ人ハ米

故ニ此ノ如ク_云其他ノ土産椰子橙橘柚香櫛南瓜西瓜ナ

ク_フ葉ノ萋葉_名マンガス_名等極メテ多シ又ハ夕_ヒア_城

ノ周匝ノ地ニハ諸豆黎豆菜芥葱蒜萵苣アスヘルシイ

ス_ノ草_名等諸草菜ノ種皆コレヲ和蘭ヨリ輸送シテコレヲ

ウヘ今皆夥ク蕃生セリ諸ノ平野ニハ甘蔗極メテ夥シク

叢生シテ熟スルノ比ニハ其茎二人重ナリ立タルノ夕ケ

ニ及フ又ハナロウカン_ノ府ニ近キ所ニハ硫黄山アリ時

トシテ火ヲ出ス_ト恰モ西_方里亞_{地中海ノ大島ニシテ意}

ノエト十山ノ如ク石ヲ爆射シテ_ハナロウカンニ到リ烟

霧_延蔓又シテ空氣コレカ為ニ暗シ又其海邊ニハ蠅ヲ得

ル_ト甚多シ其産スル所ノ犀ハ極テ猛カアリヨク大樹ヲ

摧折シテコレヲ弄スル_ト恰モ人ノ弄丸ノ戯ヲ為スガ如

シ又伽羅木多シ人コレヲ貴重セリ其他金銅及鹽モ亦多

シ

其土人ノ内ニ多ク支那ノ人ノ遺種アリコレハ皆昔ノ世

ニ其本国ニ韃人ノ爭乱アリシ時コレヲサケテ支那ヲ去

リ此島及此邊ノ諸島ニ遷居シ其子孫今夥シク繁茂セル

者ナリト云大抵其土俗慥輕傲慢不睦ニシテ爭ヲ好ム半

亞細亞諸島誌

ハ浮屠ノ教ヲ奉ジ半ハ馬哈默ノ教ヲ奉セリ古ハ只浮屠
 ノ一種ナリシガ一千五百六十年日本永祿三年明嘉靖三十九年ニ馬哈
 默ノ教此島ニ流傳シテ其一ニ諸王臣僕及海邊ニ居ル
 ノ人コレヲ奉セリ又近來ガトレイキペルホルンテ二種
 ノ教歐羅巴ヨリ此ニ傳來シテ土人コレヲ奉スル者多シ
 其歐羅巴洲ヨリ始メテ此ニ通シタルハ波爾杜瓦爾國ノ
 人始メテ板沘ニ到リ交易シテ次年ニ大利ヲ得テ又本國
 ニ帰帆セリ

其後和蘭ヨリ海船ヲ發ル_一益多ク次第ニ東方ニ通商シ
 テ一千六百零二年日本慶長七年明萬曆三十年ニ東方互市ノ府ヲ置

テ其諸島ノ地ヲ經畧スルニ及テ再ヒ此島ニ航海シテ板
 沘ノ地ニ通商セシカ此時諸厄利亞ノ人既ニ板沘ニ居テ
 互市ヲ專ラニスルヲ以テ其土人ニ勸メテ和蘭人ヲ拒マ
 シムコレニ因テ和蘭ノ人遷リテシヤカタラノ地ニ來テ
 ナツサワト云ヘル要害ノ処シカマヘコレニ居テ其互市
 ヲナセリシヤカタラノ王初メハコレヲ許スト雖モ其後
 ニ至テ和蘭ノ人ヲ疑ヒ忌ミテ種々ノ事ヲ託シテ詰難シ
 為シ遂ニ其構ウル所ノナツサウノ要害ヲ毀ツ和蘭ノ人
 コレヲサケテ居ヲ遷シ又新タニ一ノ要害ノ処シカマヘ
 テマウリシウスト号セリ

和蘭ノ人此島ニ於テハ諳厄利亞及シヤカタラノ人ト其
勢ニ既ニ相容レラレサルヲ知テ因テ以テ兵力ヲ用テコ
レニ勝ン_一シ謀ル爰ニ於テ此島板沱シヤカタラノ二王
ト戰爭ヲナシ彼テ王ノ兵和蘭ノ所構ノ要害ノ地ヲヤフ
ル然レ_一和蘭ノ世子ヲアル_{大都督ヤンヒイテルセクウ}
ン。ナル者大軍ヲ帥ヒ數多ノ戰艦ニ駕シテ此ニ到リ大ニ
戰ヒ彼二国ノ王ノ戰ヲ悉ク擊破リテコレヲ走ラシメ一
十六百一十九年_{日本元和五年明}ニ遂ニ進ニテシヤカタ
ラノ王都ヲ攻破リ其城ヲ放火シテ灰燼トナシ其国ヲ滅
シテ悉ク其地ヲ有テ則シヤカタラノ故都ノ址ニ於テ新

夕ニ大城ヲ築テハ夕ヒアト名ケコレヨリシテ和蘭ノ人
勢ニ盛ニナル_一恰モ王者ノ如ク遂ニ此島ノ北方海邊ノ
全地ヲ有テリ_{此合戦ノ始末ハニイウホフカ東洋紀行及}
_{奉使支那行程記ノニ書弁ニハレシテイニ}
_{カ東海諸国志等ニ所載}
_{其詳審ヲ盡ス}

凡此島中著シキノ地ハ_一板沱ハ一ノ大府ニシテ周匝行程凡ニ時許_{此方ノ}其一
_一時_一其
邊ハ海ニ濱スルノ外ニハ_一牆ヲ築キテ要害ヲナシ然レ
氏堤ヲ設ケズ又其一面ハ陸ニ連ナル外ニハ_一牆ナシ其
地ニ港アリ舟船湊會便利ナル_一其比類ナシ府ノ中央
ニ當ル折ニ此国ノ戎様ニ依テ一ノ城ヲ築キコレシ其

王ノ所居トシテ其規制壯麗堅固ナリ昔時ハ此国最盛
 ニシテ其隣傍ノ諸王皆コレカ属タルヲ相續テ一十
 六百八十年日本延宝八年清康熙一十九年ノ比ニ距リシカ此時ニ當
 リテ其国乱レ其国王父子爭ヒテ起シテ戦ヒヲナシ諸
 厄利亞ノ人ハ其父ヲ援ケ和蘭ノ人ハ其子ヲ援ケ相戦
 ヒ和蘭ノ人コレニ勝チテ其子ヲ立テ此都ニ拠ル其父
 ニ亦瓜哇諸州ノ人ヲ招集ノ并ニ諸厄利亞ノ兵ヲ合セ
 テ再ニ大軍ヲ以テ此都ヲセム時ニ和蘭ノ大将スヘエ
 ルマン此都ニ在テ大都督シカアマルテンコレバタハ
 アニ所居ノ
 大都督マテアルカ援兵ト共ニ大ニ戦ヒ悉ク敵ヲウチ
 ヘシ

破リテ其国ヲ平定シ遂ニ其子ヲ立テ此国ノ王ト為セ
 リ按ニ此事貞享元年甲子長崎ニシテ和蘭ノ古加比丹
 コンスタンテンランズ新加比丹ヘテコレハバ
 イトノムガ上クル所ノ風説書ニ於テコレマテ数年
 ニモ其事見ヘタリ
 ノ間此都ニ居テ夥シク互市ノ為ル諸厄利亞及弟那瑪
 尔加ノ人ヲハ皆コレヲ追出シ和蘭ノ人独リ其利ヲ白
 ノテ国王ト約ヲナシ其互市ノ府ヲ其都ニシキ兵ニ守
 兵ヲ置テ王ノ護衛ニ備ヘ其王今遂ニ和蘭ノ属国ノ如
 シ凡此都初ノハ其商賈湊會シテ土地ノ繁華ナルヲ東
 方諸国ノ甲タリシガ彼大乱ノ後ハ其ニ比スレハ甚ク
 衰微セリ

マテランハ南方海辺ノ地ニアリテ又廣大堅固ノ府ナリ
 王驕傲ニシテ其勢ヒシ恃ミ自ラ尊号ヲ加ヘテ瓜哇總
 国ノ帝ト称セシガ其後一千六百二十九年日本寛永六
年明崇禎二
 年ニ軍ヲ興シハタヒヤヲ侵サムトシテ大ニ敗軍シタ
 ルニ因テ其勢ヒ衰ヘリ相傳ワリ此王ノ護衛ニ女人兵
 器ヲ把レ者凡一万人アリテ昼夜ヲ以テ其當值ヲ交代
 スルト云而シテ此王彼敗軍ノ後ニ都ヲ遷シテヨリハ
 此都ハ今甚衰微蕭索アリト云リ
 カルタソウラハマテランヨリハ稍北ニ在テ此島ノ中央
 ニアルナリコレ則今ノマテランノ王遷テ都ト為スノ

所ナリ此都ニ外郭ヲカマヘス人家凡三万許其室屋ノ
 制多クハ唐陋ナリハハ不詳ニシテ元中略ノ下ニ地
 ハタヒアハ甚壯麗ナル府城ニシテ板沓ノ東ニアリ其間
 相距ルノ行路凡二十時此方ノ程則大島ノ北邊ニ在テ
十時
 海ニノソムコレ古ヘノ王国シヤカタラノ都ニシテ地
 ニ河ナリ亦シヤカタラト名クコレ上ニ云ヘルカ如シ
 一千六百一十九年日本元和五年明
万曆四十七年ニ和蘭人コレヲ攻
 テ破壊シ尋テ其址ニ新ニ城郭ヲ造建シ己レガ本国ノ
 古名ヲ以テコレニ命シテハタヒヤト云リ昔入尔馬泥
亞ノ人カテ
 ンナル者今ノ如蘭ノ地ヲ開基ニテ国号ヲハタヒヤト
 号セリ其後分テオツテントセエラントノニ洲トナセ

此府ノ前ニ當リテ一ノ港アリテ此処ハ舟船碇ヲ下
スニ極テ安穩ナリ港中ニ「オシリエスト」ト云ヘル一ノ
小島アリ此島上ニ「ハタヒア」ノ船ヲ造ルノ場ヲ建テ工
匠其処ニ集リテ斧鉞ノ声恒ニ絶ル時ナシ而シテ此府ノ
前ニ別ニ又一ノ港アリコレハ此府ノ前ノ地細ク海中
ニ尖出シタル所アルニ因テ自ラニノ港ヲ分テルナリ
其後ニ云フ所ノ港ハ其廣廿九一千二百ゲノエ子レケ
レエテン一ケノエ子シケレエケンハ日本ノアリ然レ
曲尺ニテ三尺ニ寸弱
氏此港ハ大船ノ出入ハ不便利ニシテ只中船以下シ此
処ヨリ發ス其「オシリエスト」島ノ上ニハ要害ヲ構ヘテ大

銃ヲ列置シテ此湊ノ固メトセリ此島ハ夕ヒアノ府ヨ
距ル一ノ二里日本ノ四里ナル処ニアリ此島ト府トノ往來
ハ且ヨリ夕ヘニマナ時此方ノ五時ノ間ハ風海ヨリ地ニ吹
クニ因テ諸舟島ヨリシテ府ニ到ルニ宜シク夕ニ到レ
ハ風轉シテ陸ヨリ起ルニ因テ諸舟府ヨリシテ島ニ到
ルニ宜シク此「オシリエスト」島ノ周辺ニ尚教多ノ小島ア
ルニ因テ舟船波浪ヲサクルニ宜クシテ此港ノ壯麗繁
華ニシテ夥シク舟船ノ湊會スルト他國ノ諸海港ニ勝
レリ
此港ノ廣大壯麗ナルト亞細亞諸國ノ冠ナリ其府ノ

周囲モ亦大ニシテ其街衢ノ制ハ皆長クシテ其幅モヒ
ロク且其規制甚有整ニ街衢ノ間ニハ樹木ヲ列子植テ
四時恒ニ緑ニコレヲ以テ日光ヲサケ涼氣アラシム此
諸街衢多ク其中央ニ湟ヲ鑿キテ彼レ此レ相通シコレ
ニ因テ府内皆小舟ヲ往来セシメテ日用甚便利ナリ此
諸湟ニ石橋ヲ通スル者凡五十六ヶ処其湟ノ水ハ常ニ
満テ且清冷ナリコレ彼シヤカタラト云ヘル大河ヲ引
テコレヲ通流セシムルニ因テ也

此府内ノ大家ハ凡二十四百四十八アリテ其造建ノ規
制ハ一ナラスコレ諸国ノ人雜居スルカ故ニ其屋室ノ
制各其好ム所ニ從テ異アルナリ而シテ和蘭ノ人所居ノ
家ハ皆和蘭本國ノ戎様ニ因テコレヲ造建シテ其規制
最華美ナリ

此府内ニ所居ノ和蘭人ノ外凡十余人則「モオレン」麻辣
襪ル滿刺加「アン」ホイナ等ノ人ニシテニイウホフカ犯
行ヲ按ルニ此外
ナルヲ麻昌沙ナルフキイス地本ナル等ノ而シテ支那ノ人モ
亦多シ各自ラ郭ヲカマヘテコレニ聚リ居リテ自由ニ
商賈ヲ事トナシ毎年貢杭ヲ此官府ニ輸スルナリ

此府城ハ其造建堅固ニシテ其外ハ堤ヲキスキ上ニニ
十二ヶ処ノ屯兵ノ營ヲ設ケ又別ニ海隅ノ所ニ一郭ヲ

キツキ四ヶ処ニ兵ノ営ヲ設ク其規制皆甚壯麗ニシ
 テ其所用ノ石ハ皆歐羅巴洲ヨリコレヲ輸送セリ此四
 ケ処ノ兵ノ営其二ハ海ニ向ヒ一ハロベイン夜光宝
石ト云
 義ト名ケ一ハバアレル明珠
ノ明義ト名ク又其二ハ府ノ方
 ニ向ヒテ一ハチアマント金剛宝
石ノ義ト名ケ一ハサツヒイ
 ルサツヒイ
ニ珠玉ノ類ヲ以テスル
ト故ニ斯云タルヘシ
 ト名ク凡諸營ノ上ニ皆数多ノ巨銃ヲ列置シテ要害ヲ
 嚴重ニシ營毎ニ守兵ヲ六百人ヲ備フ此府ノ周囲ニ尚
 五ヶ処ノ小城ヲ築キテ府ノ固メトセリ又古ヘノシヤ
 カタラノ玉城ノ遺址ハ此府ヨリ半時程此方ノ四
半時程ナル

心ニアリテ支那ノ人ノ墳墓ノ所ニ近附セリ
 ハタヒアノ府外ニ尚数多ノ外郭封疆ノ類ヒコレアリ
 テ諸国ノ人又各郭ヲカマヘテ此処ニモ聚居シ其内ニ
 各コレカ首領タル者ナリ
 其他府内ノ人ノ別業園庭等モ亦多シ其他サアカモオ
 レンス水磨ノ勢ニ因テ板ヲ鋸
ルニスルヲ為スモノナリハヒイルモオレンス水磨ノ勢ニ因
テ茶草烟草ノ
 類ヲ細末ス等ノ類ヒモ種々又コレアリ
 抑和蘭ノ人此バタヒアノ府ヲ建置シテヨリ則コレヲ
 以テ和蘭所領ノ東方諸国ノ内ナル諸城地諸商館及衆

シ植ヘ土ヲ開クノ諸所ノ事務ヲ總ヘ主ル根本ノ地ト
 定メテ則此府ヲ鎮守スル所ノ大酋ニハゴウヘル子ウ
 ル子ウルセ子ウアル。ハン。子デルラントスインチイト
 云フ号ヲ授ク 則和蘭所領ノ印度諸州ノ 爰ヲ以テ威權
 亦甚尊重ニシテ殆ント王者ノ如ク諸印度諸国ノ商賈
 交易政金軍旅諸緊要ノ大事并ニ諸国ノ王公ト通艘
 礼節等ニ至ルマテ皆此府ニ於テコレヲ主リ裁判スル
 ナリ今ノ此府ノ大總管ヲヤアツプ。モツセルハンスタ
 ラアレント云フ コレ此書刊刻ノ時代ヲ去ナリ此書刊
 刻ハ一千七百五十六年ナリ日本宝曆
 六年清乾隆二十
 一年 エニキホイセン 和蘭本國ノ生レニシ
 地ナリ

一千七百五十年 日本寛延三年清
 乾隆十五年 仁前ノ大總管イム

ホツキノバロン 辭ノ名ニシテ疾ニ次
 カノ日ト試スヘキ者 キユスタアフウ

井ツレムナル者此府ニ於テ卒セシニ因テコレニ代リ

テ大總管トナリシナリ ヤンヒイテルヤクウニヨリ以
 来セ々此ノ府ヲ鎮守セシ大總
 管ノ肖像及其人々ノ一代ノ傳ハハレン
 テイン東海諸
 国紀行及ヒフレホストカ万国紀行集成ノ書ニノセテ

甚精
 詳也

此府内ニ四ノ寺觀学院有テ各講師十二人アリ其内ノ
 二処ハ和蘭語ヲ用ヒ一處ハ波尔杜瓦尔語ヲ用ヒ一處
 ハマレイス語ヲ用ヒテ共ニ法ヲ説キ書ヲ講シテ教化
 シナス又府外ニモ五ヶ処ニ寺觀アリテ皆説法教化ヲ

十スナリ

此府内ニ於テ最壯藩ニシテ名アル者ハ諸器ヲ貯フノ
庫育嬰堂戰艦ヲ貯フルノ場等ニシテ又東方諸国交易
ノ無数ノ夥シキ化物等皆其類ヒテ分チ各別ニ府庫ヲ
建テコレヲ貯フナリ 利明日鳴保
法最以可貴

一十六百九十六年 日本元禄九年清康
熙三十五年 二月四日五日ノ

西日ノ夜間ニ此地大地震アリテ数多ノ人家ヲ顛倒シ
土人モ損傷セシ者多クコレ有シ也

一十七百四十年 日本元文五年
清乾隆五年 十月八日ニ此地ニ居住

スル処ノ支那人人数多黨ヲ結ヒ且外ヨリ来リタル者

ノ助ヲ得テ此府ノ邊ニ放火シテ乱ヲ作セルニ因テ大

ニ騷動アリシガ此府ヨリコレヲ討平ケテ其乱ヲ作ス

者ヲ誅シテ府内又静謐セリコレ人ノ傳フル所ヲ聞ク

ニ其外ヨリ来リタル者ト云ハ則支那ノ帝ノ假兒ニテ

悪事アリシニ因テ支那ノ本国ヲ追出サレテ爪哇ニ流

寓シテ此乱ヲ企シト也

允ハ夕ヒア城ノ外ニモ和蘭人所領ノ地尚多ク爪哇島

ノ北方海濱ニ傍テ城池ヲ建テ要害ヲ構ヘテ不意ノ冠

敵ニモ備ヘ且コレヲ以テ商賈交易ニ便リセシム

ハ夕ヒアヨリ始マリテ東ニ向フ処ニ子イリボント

五所アリコレハ瓜哇ノ内ニ於テ大城地ト称スル者
 ノ其一ニシテモト一種ノ王国ノ都ナリシガ今ハ其
 地皆和蘭ニ属セリ又夕ガルサマラングノ二城共ニ
 北方ノ海濱ニ在テ皆今和蘭ヨリ大商館ヲ置ク又下
 ルラバエレヤハラノ二処ハ初メハ和蘭ノ人爰ニ商
 館ヲ置シカ一十六百一十八年日本元和四年明ニ土
 人和蘭ノ人ニ畔テ乱ヲナシ和蘭ノ人殺シテ
 爾ニ因テ和蘭ノ大總管ヤンニヒイテルセクウン十
 ル者コレヲ討平ゲ其地ニ放火シテ灰燼トナシ其商
 館ヲハサマラングニ遷セリコレヨリシテ次第ニ順

ヒテ東方ニ向ヒヤワナランバムグトウバンシダユ
 ウケレツシキワウラハヤカソムハパツサロウワン
 ハ十ロウカン等ノ地アリテ其次ナルパランバン一
 名ハラム互アント云ヘル地ハ則東方海隅ノ処ナリ
 瓜哇近傍ノ諸小島ノ内ニ於テ最著キ者ハマチユラハ
 レイノニシテ其ハレイ島ヲハ又称シテ小瓜哇氏云又
 瓜哇ノ西方ノ隅ニ當リテフリンセンエイラントト云
 島アリ和蘭ノ本国ヨリハ夕ヒアニ赴ク船シユングノ
 海峡ヲ過キントスルニ若シ風逆ニシテ進ムニ勞スル
 時ハ必ス此島ニ碇ヲ下タシテ以テ順風ヲ待ツ又ハ夕

ヒアヨリ和蘭ノ本国ニ赴クノ船士亦此島ニ泊シテ薪
水ノ用ヲ弁シテ而後ニ去スト云

爪哇島ノ善地曰ハ世ニ名譽アリテレラント人ノガウ

トレチト和蘭七洲ニ於テ東方ノ言語ヲ以テ記セルヲ

「アムステルダム」和蘭ニテゲラルトハンケウレン人ノ

カ刊行セル者也

波耳匿何島

此島ハ印度ノ大洋ス内ニ於テ其幅員最廣大ナル者ニシ

テ其南北ハ一百八十里日本東西ハ一百二十里日本

百四十里其地形鈍圓シテ又尖リ赤道昼夜平線ノ下ニアリ

其島中ノ河水稍大ナル者ハ文郎馬神河ニシテ南ニ流ル

者ヲ最トセリ其他ハラハシユツカダナサムハスシソル

等ノ諸河アリ凡其地処々沼沢多ク氣候不順ナリ

其土産凡腦最上品ニシテ天下諸国ノ所産ニ勝レタリ其

他多ク肉桂生姜胡椒蘇合井口オク本脂乳香沙糖蠟蜜

ノ木綿錫鉄金水銀硝子及羨ナル金剛寶石ヲ出産セリ此

金剛寶石ハ墳中ニ於テ掘得ルモアリ又シユツカタナノ

河水ノ中ヨリ撈得モアリ野獸ニハ野猪野羊ノ熊鹿象等

ノ類ニ甚多シ

其土人ハ半ハ馬哈默ノ教ヲ奉シ半ハ浮屠ノ教ヲ奉セリ

其馬哈默教ノ徒ハ多ク海邊ノ諸城池ニ居リ浮屠教ノ徒
ハ海ヲ離ル内地ニ居コレヲ名テハイアヨト云此浮屠教
ノ徒ハ其性愚陋ニシテ礼節ニ乏シ政羅巴人はト通交ス
ルト云シ然レ凡其俗正直ニシテ敢テ馬哈默教ヲ奉ス此
土人ノ風俗蠢惰不睦ニシテ詐偽多キ者如クナラス
此島中多クノ王国ヲ分ツ而シテ其北方ニアルノ一王国ヲ
波耳菴何ト云其勢最隆盛ナルニ因テ此一大島ノ總名ヲ
モ又波耳菴何ト稱スル也其他ニ父郎馬神シユツカタナ
サムハス及尚多クノ国王アレ凡多クハ波耳菴何ノ王ニ
服屬スルト云

政羅巴諸国殊ニ諸厄利亞及和蘭ノ人一千六百年

日本慶長五年

明万曆二十年後ヨリ屢々此島ニ到テ其海邊ニ商館ヲ置

キニ事アレ凡其土人性不睦強暴ナルニ因テ動モスレハ
争鬪殺傷ノ事ヲ起スヲ以テ其後ハ政羅巴ノ海船爰ニ到
テ深ク交易等ヲナスヲ稀ナリ其土人時々其貨物ヲタス
サヘテハ夕ヒア等ノ諸処ニ来リテ貿易ヲナスナリ此島
中ニ於テ名アル城池ハ

波耳菴何ハ此島中ニ於テ最大府ニシテ其地方ハ一ノ
海湾ニノゾミ水中ニ大橋ヲ建テ其上ニ造営ヲナス
ト頗ル勿搦奈亞意太里亚ノ都城ニ似タリ其都内

多ク小舟往来セリ人家凡二万一千余皆木及ヒ粘
土ヲ以テコレヲ造ル然レ氏其郭ハ石ヲ以テコレヲ
築ケリ

サムハスハルノテシユツカタナノ三城ハ各一國ノ王
ノ都トシ居リテ皆自立スル者ナリ共ニ此島ノ西方
海辺ニアリ

バンヤルハ此島ノ西南ニアリ一十七百年日本元禄十三年

二十九ニ諸厄利亞ノ人此ニ要害ヲカマヘシガ七十

零六年日本宝永三年ニ土人トノ争乱ニ因テ又廢類

清康熙四十五年

父郎馬神ハ此島ノ南方ニアリ其地ニ河アリ名モ亦同

カイトンギイハ海ヨリハナレタル処ニ在テ有名ノ城

池ナリ又郎馬神ノ地ヲ距ルヲ遠フカラズ

ワタヒユウレハ此島ノ東方海濱ノ処ニ所在セリ

食カ百私島并ニ其近傍ノ諸島

食カ百私島世ニ又コレヲ麻加沙尔島云コレ此島中ニ

如此ニ称スル國王ノ都アルニ因テ名ケル也コレ下ニ云

或ハ食カ百私麻加沙尔ノニ王分ヲ治ルニ因テ世ニ此島ヲ

耳遷何ノ王都ニ因テ一島ノ其幅員直徑南北凡一百里日本

ノ二百 東西凡六十里 日本ノ一百二十里 アルナリ

此島氣候ハ稍平和ニシテ其近傍諸島ノ熱氣堪ヘカラサルガ如クニ非ラス土産米穀鉄焦椰子無花草黄金象牙白檀木綿諸香茶ノ類甚々多シ

其土人ハ多ク馬哈點ノ教ヲ奉セリ昔ノ世ニ好ムテ人肉ヲ食ヒシト云相傳フコレ昔シハ馬路古ノ諸島ニシイテ其重罪アル者ヲハ此島ニ放謫シテ此土人ニ食ハシメリ

ト按ニ西藏記ニ西藏ノ地ノ罪人ヲハ其江南ニ送然レモテ垂人ニ食ハシムト云此類ニナルヘシ

和蘭ノ人此ニ至テヨリ此土人其風俗改ヘリテ礼節ヲ知ルニ至レリ又此土ノ人ハ戰ニノソミテ勇悍ナルヲ他ノ

隣傍諸島ノ人ニ勝レリ爰ヲ以テ諸国ノ君長多ク此土ノ人ヲ用テ其護衛ノ軍士ト為ス又歐羅巴ノ人既ニ亞細亞ノ諸国ニ通シテヨリ此土ノ人モ次第ニ其風化ニ習テ昔ノ如ク強暴不睦ナル風ハ今甚々少ナシト云ヘリ此島古ヘノ世ニハ六ノ小王アリテコレヲ分子治メシカ今ハ惟一ノ王国トナル其北ニ在者ヲ食カ百私トイヒ南ニアル者ヲ麻加沙ルト云フ其国都ノ名モ共ニ亦同ジ

此ニ王一千六百六十九年 日本寛文九年 清康熙八年 和蘭ノ人ト争

シナシテ其戦久シク止サリシガ後和睦ヲ結ヒテ和蘭ノ人遂ニ此島ノ海边数ヶ処ノ地ニ拠テコレヲ有テ此国王

ト互市ヲ為シ且此島人ト誓約シテ他方ノ人ト交易セシ
ノス殊ニ波尔杜瓦ルノ人ヲバ固ク禁シテ此島ニ居リシ
モノヲ追出シテ其居処ヲ奪ヘリ今和蘭ノ海船此島ニイ
ツル者ハ皆麻加沙ルノ港ニ入ルナリ凡此島中ノ著キノ
城池ハ

麻加沙ルハ此島中有名ノ都ニシテ西南ノ海辺ニアリ

テ善キ港ニソノリ一千六百六十九年

日本寛文九年
清康熙八年

年ニ和蘭ノ大将コル子リススヘエルマン此都ヲ奪

ヒ取りテ堅固ナル城郭ヲキスキ此大将ノ生レタル

本国ノ地名ヲトリテ此城ニ命シロツテルダムト云

コレヲ以テ彼戰ヲ好メル麻加沙ルノ人ヲ制御シテ

和蘭ヨリ此島ヲ鎮守スル都督ノ居城トナシ並ニ商

館ヲキ精兵七八百人ソナヘテ要害嚴重也

コアハ麻加沙ルノ東ニ在テ長クシテ廣キ海湾ニソ

ニ則此島ノ国王所居ノ都城ナリ此地ヲ以テ麻辣襪

ルノ海辺ナル臥亞ノ地ト混スヘカラス

ヒユトホニトミ子テトリチユラテモマヤモウタル等

モ亦皆此島中ニ於テ著テノ地ナリ

食力百私島ノ近傍殊ニ其南方ニ数多ノ小島アリ其内

著者尤ノ如シ

「ホウトン」ハ食カ百私ノ東南ニ在リ此島一千七百五十

三年日本寛督三年清乾隆十八年ニ和蘭ノ海船此ニ到テ碇ヲ下

夕シ薪水ヲ採リシ事有テヨリコレアルヲ知レリ

按スルニ此言フ所ノ年数必ス誤字アルハシ如何ントナレハ一千七百四十八年ニ刊刻セルコウランテ

シトルコト云ハル書ニ曰ホウトン島又ハトシ云食カ百私島ヲ距ル一四里其島長廿二十五里廣廿二

十里ノ土地ニ森林滿テリ一ノ大府在テコレヲカラシエタングト名クト記セリ

地木尔漢ニ亦コレヲ池間トモ又吉里地間凡記セリハ食カ百私ノ南ニ當

テ其ノ島稍大ナリ土産白檀極メテ多シ和蘭ノ人コ

レヲ得テ以テ支那ニ輸送ス

此地又其人ヲ他ニ嚮ク一甚夕多和蘭ノ人此島ノ西

南ノ海岸ナル岩石ノ上ニ一ノ堅固ナル岩ヲ築キテ

「コンコルゲア」ト名ケ守ヲ置キ兵士五六十人アリ以

テ此島ノ人ヲ制御スルニ足ル波尔杜瓦尔ノ人ニ亦

此島ノ北邊ニ居テ府ヲキスキテ「ヤハオ」ト名ク

「フロレス」一名「エンテ」ト云フ地木尔ノ西北ニ在リ此島

中ニ芳香芬馥タル花極テ多シ波尔杜瓦尔ノ人始メ

テ爰ニ距リ其花ニ因テ以テ此島ヲ名ク按ルニテテ

花ヲ呼テフロレスト云フ

此他尚梭羅「チエンタナ」「コムバ」「ロムフウ」及「ハテル

ノステルス」ノ諸島等アリ

馬路古ノ諸島

馬路古ノ諸島ハ食カ百私ノ東ニ在テ非利皮那諸島ノ南ニ當リテ多クハ赤道ノ下ニ散在セリ

相傳フ古ノ世ニ此諸島ニテ重罪アリテ死ニ抵ルヘキ者ヲハ皆コレヲ食カ百私嶋ニ放流シテ彼島ノ人ニ吟ハシ

ノリト云フ此事上ノ食カ百私ノ条ニモ見タリ

此諸島皆氣候甚熱シテ不順ナリ香茅ヲ出ス極テ多シ就中其丁子及肉豆蔻ヲ産スルノ夥シキヲ殆ト思議ノ

及フ所ニ非ス皆コレヲ歐羅巴ニ輸送セリ故ニ又此諸島ヲ稱シテスペセレイエイランゲント云ナリ則香茅諸島ノ義

古ノ世ニハ此島悉ク一王ノ政治ニ歸シテ其王ハ「テル」

アテ島ニ都ヲ建テ他ノ諸島ニハ皆守ヲ置テコレヲ治メリ然レ氏歐羅巴洲ニ於テハ未タ此諸島アルヲ知サル

シガ曆數一千五百年日本明應九年明弘治十三年余ノ頃ヒヨリ以西

把尼亞及波爾杜瓦ノ人始メテ爰ニ至リ其諸島ヲ陵轉シ爭戰等ヲ為セシヨリシテ世ニ此島ノ事状ヲ詳ニセリ

コレ其始ノ曆數一千五百年ニ滿タントスルノ時節ヨリシテ彼上ニイヘル二国則以西把尼亞ト波爾杜瓦ノ二国ヲ云ノ人頻リニ諸

外国ノ地ヲ開クヲ勉ムルニ因リ羅馬ノ教化主アレキサンテル第六世ナル者彼二国ノ人ヲ召シ諭シテ一千四

百九十三年日本明應二年令シテ曰ク今ヨリ後波

杜瓦ルハ東方ノ国ヲ開キ以西把尼亞ハ專ラ西方ノ国ヲ

開キテ各コレヲ從ヘテ外邦ノ人ヲシテ其徳化ヲ彼ラシ

メヨト婆尔杜瓦ル及以西把尼亞ノ国王共ニコレニ從ヒ

ラコレヨリシテ波儿杜瓦ルノ諸船ハ專ラ東方諸国ニ渡

海シテ一千五百一十五年日本永正十二年始メテ馬路

古ノ諸島ニ到リ威力ヲ以テ其土人ヲ從ヘテ多ク其地ニ

占拠セリ然ルニ以西把尼亞国王ヘルテラントカトレイ

キナル者此諸島所出ノ香菜ノ利極テ夥キヲ聞テコレヲ

羨ム則亦己レガ本国ヨリモ海船ヲ東方奈シテ此島ニ到

ラシメ敢テ悉ク此諸島ニ通セントニハ非ス波儿杜瓦ル

ノ人ト相和シテ其利ヲ分タシメテハカルトイヘ氏前キ

ニ教化主ノ定メタル法アルニ因テ明ラカニ船ヲ東方ニ

奈スルヲ能ハス爰ニ於テ船ヲ西方ニ奈シテ海道ヲ求メ

テ此島ニ通シ且大地球ヲ一周セントセリ次テ一千五百

一十六年日本永正十二年カアレル第五世ノ帝其外祖

父ヘルテナンドカトレイキニ嗣テ以西把尼亞国ニ主ト

ナリ按スルニヘルナンドカトレイキニ男子ナクシテ

帷一女アリコレニ因テハル馬泥亞国ノヨキシミリ

アノ帝ノ皇子ヒリヒエスヲ請テ塔トナセリヒリヒエス

先達テ卒ス其長子カアレル外祖ノ位ヲツイテ以西把尼

亞ノ王トナリ次テ一千五百一十九年ニ本国ノ祖父マキ

シミリアン帝祖シテ別ニツギナキヲ以テ本国ノ帝位ヲ

ツイテカアレル第五世ノ帝ト称セリ此帝ハ一生涯ノ間
入ル馬泥亜国ノ帝位ト以西把尼亞国ノ王位トヲ兼テ西
国ヲ治メ英雄ニシテ諸国皆畏服セリ後ニ帝終ルニ及ケ
命シテ其弟ヘルナントヲ立テ本國ノ帝トクシ其子セ
リヒユスヲ立テ以西把尼亞ノ一千五百一十九年日本永
正十六

四年 正徳十ニ其遺志ヲ継キテ彼名譽ノ大将ヘルナ
ドマゲツラ子ス漢ニ墨瓦蘭ニ作
ルハコレナリニ命シテ大艦五隻ニ駕

シテ西海ニ泛ミ一千五百二十年日本永正十七年ニ始メ
明正徳十五年ニ始メ

墨瓦蠟泥ノ海峡ヲスキテ西ニ向テ大平海ニ出テコレヨ
リ非利皮那ノ諸島ニ至テ其土人ト戦ヲナシ又馬路古ノ

諸島ニイタリ其香茶諸品ヲ収メテ其副將セハスチアタ
ンデカソト共ニ以西把尼亞ニ帰帆セリ一千五百二十五

日本天永五年明
嘉靖四年ニ帝又命シテ大艦六艘ヲ發シ大将フラ

ンソイスカルシアス及ヒコツテフリイトセヒサシ
シテコレヲヒキイテ又上ニ所言ノ海道ヲ適キ馬路古

ノ内最有名ノテルナアテチドルノ西島ノ地ヲセメテ破
レリ

コレヨリシテ以西把尼亞ノ人ト波尔杜瓦尔ノ人ト此諸
島ノ利ヲ爭ヒテ大ニ戦ヒ為セシカ一千五百二十九年相

亨祿二年明嘉
靖八年ニ和腔ヲ為シ約ヲ定メテ此島ノ利ヲハ波

尔杜瓦尔ノ人コレヲ占ムヘシ只夕其二代ユルニ数多ノ
貨ヲ以西把尼亞ニ輸スヘシトテ則三万五千テユカアテ

ン金錢ノ名一ヲ以テストイヘルトイヘル重ヲ以西把尼
ニ分ナル小銀錢ノ百ニアツ
亞ニシクリコレニ因テ此後ハ以西把尼亞ノ人敢テ此諸
島ニ到ルヲナシ

波爾杜瓦爾ノ人コレヨリ後ハ独リ此島ノ利ヲ擅ニセシ
ガ又其後一千五百八十年日本天正八年ニ以西把尼亞波

爾杜瓦爾ノ二国合テ一トナルニ及テ一千五百七十八年

セハスチアン祖ス此ハ嗣ナリツキハ少年ヨリ僧トナリ修
ツニ年ニシテ祖ス此ハ嗣ナリツキハ少年ヨリ僧トナリ修
道セシ人ナルカ故ニ一生不犯ニシテ子ナシコレニ因テ
其国嗣ニ乏シ此府ノ以西把尼亞國王ヒリヒユスハセハ
スチアンノ曾祖父エマニユウル王ノ女上ニユカアレル
弟五世ノ帝ニ嫁テ所生ニシテ且ヒリニユス王ノ妹ハセ
ハ人チアン王ノ母ナリコレニ因テ一千五百八十年ヨリ
シテ以西把尼亞ノ母ナリコレニ因テ一千五百八十年ヨリ
シテ以西把尼亞ノ母ナリコレニ因テ一千五百八十年ヨリ

凡六十年ノ間ナリ其間波波以西把尼亞ノ人又此諸島ニモ

往來シ且此諸島ヲ以テ非利皮那諸島ヲ總ベ管ル大酋ノ

指揮ニ從ワシメント欲ス非利皮那ノ諸島ヲ總ル大酋ハ

呂宋島ニ在リ次然レ凡此時ニ當リテ和蘭ノ航海スル

日ニ盛ニシテ一千五百九十九年日本慶長四年明ニ和蘭

ノ海軍ノ大將ウエイフランドハンワルウエイキアル者

大船四艘ニ駕シテ此諸島ニ距テ其土人ニ深ク恩惠ヲ施

シ其歡心ヲ結ヒ交易シテ又大利ヲ得タリ次デ一千六百

年日本慶長五年明ニ和蘭ノ海軍ノ大將ヤアコツコハン

子ツキ又爰ニ來リテ波爾杜瓦爾ノ人ト其利ヲ爭ヒテ遂

ニ戦ヲ為ス而ノ此時此島ノ土人既ニ多年ノ間波尔杜瓦
ルノ人凌虐セラレタルヲ苦ミ怨ミシニ因テ皆波尔杜瓦
ルニ叛キテ和蘭ヲ助クコレニ因テ和蘭ノ人大ニ勝利シ
得テ一二年ノ間ニ遂ニ此島々ノ処々ニ居リシ所ノ波尔
杜瓦ル人ヲ悉ク追出シテ和蘭ノ人独此諸島ノ利ヲ擅ニ
セリ

此諸島ニ多クハラテイスホオゲルト名クル鳥ヲ産ス則今

俗ニ門言ノ風鳥東方諸国ノ人皆コレヲ貴重セリ昔時ハ世ニ此

鳥ヲ足ナキ者ナリト思ヘリコレハ此土人此鳥ヲ捕獲テ

其足ヲ截テ他邦ニ輸送スルニ因テナリコレ此鳥ノ腐ルヲ防クカ為ニ其

臍府及足ヲモ去リ軋カシテ諸邦ニ齎クト云ヘリ爰ヲ以テ古ヘ厄勒奈亞国ノ

語ニテ此鳥ヲ呼テアフウスト云フコレ無足トイヘル義

ナリ按ルニ南徳仁カ坤輿外記ニ此鳥ヲ无對ト譯セルモノハ此義ヲ用ル者歟

古ヘヨリシテ馬路古島ト称セシ者ハ其数凡五アリテ其

島相附近シ赤道線ヨリハ少シク北ノ方ニ在テ皆小島也

其五ツハ

「テルナアテ」其中ニ於テ少シク大ナル島ニシテ其周囲

凡六里余日本ノ十里余中ニ一ノ火ヲ出スノ高山アリテ

遠ク海上ヨリコレヲノゾムベシ此火山ヲ海上ヨリノゾムノ因スコウ

テニス及ハレンテインカ紀行ノ書ニ載セタリ其王所居ノ都ヲマ

ライオト名ク和蘭ノ人モ此ニ城ヲキスキテオラン
 正ト名クコレ一千六百年日本慶長五年明ニ所築ニ
 ニシテ和蘭ノ人東方諸国ノ地内ニ於テ最初ニ造達
 セルノ城池也和蘭所置ノ此島ヲ治ムル總督爰ヲ鎮
 守シテ并ニ其近傍諸島ノ事務ヲ管領スル此島ノ王
 ハ和蘭ニソクシテ恒ニ貢ヲ為セリ昔時ハ波爾杜瓦
 ノ人此島ニカムマラムマトイヘル要害ノ岩シカ
 マヘシガ其後和蘭ノ人コレヲ破却セリ此島上ニ云
 フ如ク火山ハ時トシテ大ニ烟ヲ噴出スルヲ有テ然
 ル片ハ其烟氣延湯シテ空中コレガ為メニ暗シコレ

ニ因テ島中地震モ亦頗ル多シ曾テ一千六百七十三

年日本延宝元年清ニ大地震アリテ一ニケ月ノ後ニ

此山内ノ地自ラ凹ニ没シタルヲアリ土人ハ此山ヲ

名テカムマキユオルラト云フ

ヲトル此島別ニ王アリ和蘭ニ属シテ貢ヲ納ル

マシナン此島昔ハ夥シク丁子ヲ出セシカ今ハ大抵採

尽セリ一ノ火山アリ其頂上時々烟及火ヲ噴出スル

ナリ和蘭ノ人一ノ城ヲカマヘコレニ居テセエビユ

ルグト名ク

モテル此島最小ナリ和蘭ノ人爰ニナツサウト云城ヲ

キスキテコレニ居ル

ハシアン一名ハチヤント云此島此五島ノ内ニ於テ最

大ニシテ周囲凡七里日本ノ四里五島ノ内最南ニアリ和

蘭ノ人爰ニ居テカムノチユレト云城ヲキツキ并ニ

ハル子ヘルトト云小キ要害ノ処ヲ構ヘリ

又上ニ云五島ヲ離レテ其東及南ニ散在セル大小ノ諸

島多クコレアリ也ニ又コレ等ヲモ馬路古ノ部ニ属

セリ今其内最著キ者ヲ左ニ記ス

及碌々ハ其嶋赤道ノ真下ニ所在シ氣候不順ナリ其南

北ハ入尔馬泥亞国ノ里法ニテ凡一十二里日本ノ十四里

東西ハコレヨリハ短シ此島ノ東北海辺ノ地ハ三尖

ヲ為シテ其形僧ノ帽子ニ似タリ改羅巴ノ僧ノ帽子ヲ云ナリ其土

産米最多シ又所産ノ亀極テ大ニシテ常ト異ナリ一

王有リテコレヲ治メ其都ヲ及碌々ト云フニ因テ島

ノ名トセリ此王モ亦和蘭ニ服ゾクセリ

セラムハ大島ニシテ赤道ノ南ニアリ其地大小麥ヲ産

スル下甚多シ此島和蘭ノ人ニ属シテ他国ノ人ハ爰

ニ到ラス

フウロハ其島セラムノ西ニアリ又和蘭ニソクセリ然

レ氏其所産ノ物貨此島ニ於テ販ク下ハ為スシテ皆

コレヲ安悶番達ノ二島ニ輸シテ貿易ヲ為セリ

安悶一名「アムホイナ」ト云コレ此邊ニテ和蘭所領ノ最

美ノ島ニシテ「ヒタトリ」ア「トイヘル」堅固ナル城郭シ

キスキ守兵ヲ六百人ヲ置ク此城ハ海ニ臨ミ又内地

ニモ府ヲ置テ島ノ名ニ因テコレヲ安悶ト命スルナ

リ此島其周囲凡一十二里日本ノニコレ其初ノ一千

五百一十五年日本永正十二年ニ波爾杜瓦ルノ人ア

ントニオアフロナル者始テ爰ニ距テコレヲ取り台

拠セシカニイウホフカ東洋紀行ニハ一千五百四十

ト「ヒイ」アセヘテナル者コレヲ取リテ領セリ一千六

百零三年

日本慶長八年明

ニ和蘭ノ人コレヲ追出シ

テ此島ヲ領ス一千六百二十年

日本元和六年ニ以西

把尼亞ノ人又奪テコレニ拠シカ一千六百五十六年

日本明曆二年清ニ和蘭ノ人又再ヒコレヲ奪ヒ復シ

テ今ハ「ハタヒア」ニ次クノ要害ノ重地トシテ其所置

ノ都督ト為ス則「ヒクトリ」ア「城中」ニ居ル凡此島其丁

子ヲ出スルモノ夥シキ「勝」テ計フヘカラズ本國ニ

輸送シテ欧羅巴一洲ノ用ニ供スルニ足ルト云

番達ハ其島安悶ノ東南ニ在リ相距ル「二十四里」日本

里其周圍凡三里日本其近傍三「子」ラ「ロ」ント「ル」アウ

レワイビエルクロニリユシロサゲイン及尚敷多ノ
 諸小島アリコレヲ總称シテ番達ノ諸島ト云一千六
 百二十一年日本元和七年明天啓元年ヨリ皆和蘭ニツクシテ
 和蘭ヨリ所置ノ都督ハ其子テ一名子イラトイヘル
 島上ニ要害ノ砦ヲ築キテナツサウヲ号シコレニ居
 テ其諸島ノ事務ヲ管領セリ凡此島其肉豆蔻及フウ
 リイ肉豆蔻葉ヲ出シテ他邦ニ輸送スルコノ夥シ
 キコト恰モ安悶島ノ丁子ノ如シ又此島ニ雞及鳩ノ夥
 キコトモ亦勝テ言フベカラス
 非利皮那諸島一名瑪泥尔訶諸島

此諸島其中ニ稍大ナル者四五ナリ海上縦横共ニ二百

余里日本ノ四百余里ノ間ニ散在セリ其北ハ支那ニ對シ西ハ

印度ノ安日河ニ傍テ海中ニ鋭出セル大地ニ相對シ南ハ

シエンタノ馬路古ノ諸島ニ相對セリ

此諸島其氣候スベテ暑熱ニ其地多ク米麥美酒蠟無花草

金銀明珠等ヲ産ス魚ハ其價極テ賤ク鳥ハ其産スルコト甚

夥シ水ニハ鱈魚大亀多シ其霖雨ノ如キハ四五ヶ月モ止

マス

其昔ヨリノ土人ハ其面黒色ニシテ恰モ亞弗利加洲ノ人

ノ如ク皆海ヲ離レタル内地ニ居ル又海邊ニハ他ノ諸國

ヨリ流寓シタル人居住シ殊ニ昔ヨリシテ支那ノ人多ク
 爰ニ来リテ其種尚残り住ム者ハ總ベテ諸邦ノ人ト貨物
 シ交易スル事ヲ好ムト雖モ以西把尼亞ノ人ヲハコレヲ
 恐ル_レ恰モ疫癘ノ如クコレ昔曾テ其人多ク以西把尼亞
 ノ人ニ此島ヨリ此土人ヲ逐ヒ出サレシ_レアリシニ因テ
 ナリ_コレ明夾東西洋考等ニ云フ大命爭乱_ニ凡其人或ハ浮
 屠ノ教ヲ奉シ或ハ馬哈默ノ教ヲ奉ジ或ハカトレイキノ
 教ヲ奉ゼリ其カトレイキノ教ヲ奉スル者ハ以西把尼亞
 ノ人此諸島ニ占拠シテヨリ其土人此教ヲ受タル者ナリ
 此島ハ以西把尼亞ノ海軍ノ大将ヘルヂナンドマゲツラ

子ス漢ニ墨瓦蘭ト譯スルモノナリナル者一千五百二十年日本永正十七年

十五ニ始テ此島ニ到リテ其土人ト大ニ戦ヒテ十セリ其

後一千五百六十五年日本永祿八年ニ以西把尼亞ノ

リヒエス第ニ世ノ王ノ時ニ當リテ以西把尼亞ヨリ墨是

可北亞墨利加洲ノ新以西把尼亞國ノ都ニシテ以西把尼亞ヨリコレヲサム

シ鎮守セル小王トルウイスラヘラスロナル者大将ミカ

エルロヘステラサスヘスヲ遣シテ戦艦ニ駕シテ爰ニ到

リ其最有名ノ大島呂宋及其他ノ諸島ヲ併セ取リテコレ

ヨリシテ以西把尼亞ノ人コレニ居テ衆ヲ鎮土ヲ開キテ

コレヲ領セリコレニ因テ其時ノ本國ノ威徳ヲ尊ミ王ノ

名ヲ以テ此諸島ノ總名ト為シテ非利皮那諸島又ヒリヒ

インセノ諸島ト云又此諸島ノ中ニ於テ呂宋島最著キニ

因テ世ニ其總名ヲモ概シテ又呂宋ノ諸島ト云ナリ

凡以西把尼亞國人ノ亞細亞ニ距ル者ハ皆西方ヨリシテ

コレニ赴クヲ以テ他ノ歐羅巴諸國ノ所領ノ亞細亞ノ諸

地ノ所用ノ曆日ト不同ニシテ他ヨリ早キヲ一日ナリ

地球ヲ航海スルニ西ニ向フト東ニ向フトノ差ニテ故ニ此

島ニ於テ以西把尼亞人土曜日ナリトスルノ日ハ則他ノ

諸地ニ於テハ日曜日ニ當ルナリ

子ウエエキト云漢ニ七値ト云セリ第一ハ日曜日第二ハ月曜日第三ハ火曜日第四ハ水曜日第五ハ木曜日第六ハ

金曜日第七ハ土曜日ナリ土曜日ノ明日ハ則爰ヲ以テ其復日曜日ニ廻リ始ルモノナリ

諸ノ古ノ聖人ト稱スル者ノ祭日ニ至ルマテ支那ノ海邊

ナル亞媽港ニ所居ノ波爾杜瓦人ノ所用ト此諸島ニ所

居ノ以西把尼亞人ノ所用ト又恒ニ一日ヲ差フナリコレ

モト其日ヲ同フセント欲セサルニハ非ス上ノ馬路古ノ

條ニモイヘルガ如ク暹馬ノ教化王アレキサンテル第六

世ナル者ノ定メタル法ヲ守リテ以西把尼亞ノ船ハ皆西

方ニノミ向ヒテ而シテ此島ニ距ルニ因テ以西把尼亞ニテ

ハ此島ヲバ昔西方ノ部ニ屬シテ敢テ東方ノ島トハ稱セ

サルニ因テナリ

利明曰爰ニ夕トヘアリ午時ノ太陽ヲ天頂ニ戴キ西方ニ向ニ海陸ヲ不厭ニ飛行

セハ其日午時ニ我邦ニ復距トヘシ其実ハ翌日十レ凡大
陽ヲ天頂ニ戴キ昼ノミ十レ凡我邦ニテ翌日ニ十リタル
モノ十リコレ一日一千七百三十七年日本元文二年清乾隆二年

ニ以西把尼亞ノ王又新夕ニ其カテキス以西把尼亞十四道ノ一アニタル

シアノ内ノ西南ノ地ニ商賈ノ人會集スル府ヲ置キテ專
沿海ノ地名十リ

ラ此諸島ヨリ所輸ノ貨物ヲ販カシム凡此諸島ノ内ニ於
テ其最著シキ者ハ

呂宋島波爾杜瓦ノ人ハ呼テ瑪泥爾訶ト云コレ此島ノ

都城ヲ瑪泥爾訶ト云フニ因テノ一島ノ總名凡スル十

諸リコレ此邊ノ諸島ノ内ニ於テ其最大ナル者ニシテ以

西把尼亞ノ人ハ又呼テ新加西蠟凡云加西蠟ハ以西把

尼亞ノ本國ノ最有名ノ地ニシテ又以テコレニ命ル十

リ按ルニ明人ノ書ニ干系蠟此地多ク熊席獅子麝香獾

麝魚鷲孔雀等ヲ産ス此島中ニ於テ著シキノ地ハ

瑪泥爾訶ハ其都城ニシテ海湾ニ臨ム此府ノ一边ハ海

ニ向ヒ一边ハ河ニ傍テ橋ヲ通セリ此橋下ヨリ大船

ヲ通スヘシ都内ノ室屋皆整義ナリ要害堅固ニシテ

善キ郭ヲキスク又貨物ヲ貯フルノ府庫甚大ナリ以

西把尼亞ノ人爰ニ居ルモノ凡ニ万余人以西把尼亞

ヨリ所置ノ小王及アタルツヒスコツブ僧官長共ニ爰

ニ居ル其港ハ甚廣クシテ多クノ船ヲ泊ムルニ極テ

安穩ナリ而メ此府ノ地ハ地震頗ル多シ殊ニ一千六

百四十五年

日本正保二年
清順治二年

ニ大地震ナリテ府内三分

ノ一ヲ摧倒シテ損傷スルモノ凡三千余人ニ至レリ

爰ヲ以テ人家多クハ木ヲ以テコレヲ造テ地震ニ因

テ鎮壓セラレシヲ防クト云フ

カヒタ一名カヒテ凡云其地瑪泥尔訝ヲ去ル一凡二里

日本ノ其地ニ善キ港アリ

カルセレスハ善キ港ニ臨メル一府ニシテヒスコフ僧

コレニ居ル

カクヨシハ地図或ハニイウウエセコヒアニ作ルモノ

アリ又一府ニシテヒスコフ僧爰ニ居リ瑪泥尔訝ノ

アケルツヒスコフ僧官ノ下ニ隸ス

ヘルテナシテ子ハ又一ノ府ニシテ西方ノ海辺ニアリ

泯大脳又ミンタオト云此島又稍大ニシテ物産豊饒

ナリ其東西凡七十五里日本ノ一
百五十里南北又コレニ近シ

人居又多クシテ他邦ト交易ヲ相通ス其人健壯ニシ

テ好ムテ狩獵ヲナス鹿及野猪等ノ諸獸ナシ又其ヘ

チユアントイヘル河水ニハ金沙ヲ産セリ此島一ノ

王アリテ以西把尼亞ノ人ニソクセス

泯大脳又タホウク凡云則其王ノ所居ノ都ニシテ城

池ノ制宜ク一ノ善キ港アリ土人ハ馬哈默ノ教ヲ奉
セリ

〔サンシユアン〕又〔サンヤンスエイランド〕ト云此島底大
腦ノ東ニアリテ以西把尼亞ノ人ニソクセリ

〔ハラコア〕又〔ホウロアン〕ト云此島西方ニ在テ長サ四十
里日本ノ幅十里波爾匿何島ノ北ニアタリテ

相距ルヲ凡八里日本ノ幅十里ナリ土地不毛ニシテ人又小
ノナシ其人總テ以西把尼亞ニソクシテ賦税ヲ貢ス

〔ミントロ〕ハ其島呂宋ノ南ニ在テ其間一ノ海峡ヲ以テ
コレヲ隔ツ其海ノ幅五里日本ノ幅十里アリコレヲ稱シテ

瑪泥尔訃ノ海峡ト云此島長サ二十五里日本ノ幅五十里廣サ

十五里日本ノ幅三十里土地稍肥沃ナリ皆以西把尼亞ニ屬セ
リ其都モ亦シンドロト云其地ニ善キ港アリ

〔セヒユ一名セヘイ〕氏云以西把尼亞ノ人又名テライル
ハテロタヒンタドスト云此島ノ人初メハ其面ニ凶

画ヲナセリ以西把尼亞ノ人奪テコレヲ領セリ其内
著シキノ地ハ

ノムフレテチオスハ神島トイヘル義ナリ此島ノ東
方海辺ニ在テ造建宜シク一ノ海湾ニソノメリ

〔マタン〕ハ其島セヒユヲ距ルヲ遠カラズ然レ氏尚未タ

此島ノ事状ヲ詳ニセズヘルチナンドマケツラ子ス
上ニガ船曾テ此島ニ距テ戰ヲナセシマアリ此島人
見ニ其天ノ鏃ニ毒ヲ塗テコレヲ用ユト云

「テナタテハ今ハ」サマルト名ク此島長サ二十五里日本ノ五

里日本ノ四十里廣サ二十里日本ノ四十里其土地肥沃ナリ一千五百二十

年日本永正十七年明正徳十五年ヘルシナントマケツラ子ス始

メテ爰ニ距リテ其後以西把尼亞ノ人此島ヲ開ク

時ニ最初ニ此島ヲ併セ得タリ則其時ヲ本國ノ王ノ

名ヲ以テ此島ニ命シテ非利皮那ト云ヒ因テ其邊ノ

諸島ノ總名トナセシナリ

其後此島諸厄利亞ノ人ニ属スルニ及ニテ改テサマ

ルト云フ此島ノ東北ノ地中海中ニ尖出シタル処ヲス

ヒリツサントト名ク一千七百四十二年日本寛保二年

年ニ諸厄利亞國ノ水軍ノ大将セオルゲアンソン十

ル者此処ニ於テ以西把尼亞ノ瑪泥尔誅ノ船アクワ

ヒユルコ北亞墨利加洲新以西把尼亞國ノ有名ノ海

ヨリ来ル者ヲ迎ヘテ大ニ戰テコレヲ奪ヒ其積ミタ

ル所ノ無数ノ宝物ヲ取り得テ其將士及水手ニ至ル

マテ悉クコレヲ分チ与ヘタルコアリ

新非利皮那并ニ「ラトロ子ス」諸島

允非利皮那諸島ノ東方ニ當レル大海ヲ名テ「サンラサロ
 ス」ノ多島海ト云フコレヘルチナンドマケツラ子ス見ユ
 カ地球シ一周セル時ニ始メテ爰ニ至レリ其日ハ則古ノ
 聖人サンラサロスナル者死シテ復蘇生シタルヲ祝スル
 祭日ニ當レリ故ニ其日辰ノ名ヲ以テコレニ命セルナリ
 此海中ノ諸島ヲ分テ二トセリ則新非利皮那トラトロ子
 其非利皮那諸島ノ東方ニアルノ小島甚夥シテレイスハ
 名カ印度ノ図及テヘル名ノカ南海ノ図共ニコレヲ載タ
 リ大抵其数凡八十アリ右ノ二図并ニ此諸島ノ總名ヲ又
 ウヘツヒリツヒ子タト記セリ又ウヘツヒ新ト云ヘル義ナリ

然レハ右ノ二図共ニ弗郎察語ヲ以テ
 刊刻セルモノナルヘシ

此新非利皮那諸島ノ事状ハ近世ニ至リ稍ク始メテコレ
 ヲ知ツ得タリコレ上ニ云ヘルシナンドマケツラ子スナ
 ルモノ始メテ焉ニ距ルト其只其辺海
ヲ船行セシノミニテ爰ニ着岸ハ為サスシテ近世ニイタ
 リテ始テ此島々ノ事状ヲ得タルナルヘシ
 ハアテル僧官シコヒインナル人ノ記スル所ニ其図説ア
 リ曰其初メ非利皮那ノ諸島ヨリシテ遠ニ東方ヲノソム
 ニ時トシテ大ナル烟火ノ起ルヲ見ル因テ知ルコレ地ア
 ルナリト而シテ其尖ノ起ル者ハ或ハ空島ノ上ニ樹林ノ燃
 ルナル哉又ハ居人ノ有処ナル哉ヲ詳ニセストコレニ因
 テ先ス試ニ小船ヲ遣シテ検査セシムヘシトテ則「サマル

島及沼大脳島ノ東方ノ岬「カルラカント」ト云フ処ヨリ小船ヲ発シテ其火アル所ヲ尋子求ノシム

此小船東方ニ向ヒテ彼地ヲ求メテ遂ニ新非利皮那ニ到ルトシ得タリ而シテ彼島人コレヲ見テオモヘラクコレコノ船風波ニ因テ爰ニ漂到セルナラント則其茅ヲシテコレヲ善待セシメテ帰ラシムコレニヨリテ此船再ヒカルラカントノ地ニ帰帆セリ

此船既ニ帰リテヨリ以西把尼亞ノ人漸ク此島ノコトヲ知レリ此船ニ駕セシ輩頗ル此諸島ノ地ヲ廻リテコレヲ大抵ニ詳ニセルニ因テ帰ルニ及シテ阜上ニ小石ヲ布置シ

テ此諸島ノ形状方位ヲ為レテコレヲ明ニセリ此諸島其数八十七アリテ多クハ一処ニ相聚ル其中ノ最大ナル島ヲ「パンロク」ト名ク然レモ其王所居ノ島ハ「リユイレク」ト名ク北極一十二度ノ間ニ在テ「サマ」島ノ「キユイハム」一名「キユイカント」ト云ヘル岬ノ正東ニ當リテ則彼王ノ所在ノ島ニ距ラレトスルニハ此岬ヨリシテ針路ヲ正東ニ求メテ直ニ此ニ着岸スル云ヘリ

又此諸島ノ事ヲハテル僧官ノ名ニシテ七十二人アリ選馬ノ教王ヲ此七十二人ノ内ヨリ選選ヒ奉ル官カラムト云人ノ記ス所ニ曰非利皮那島ノ海船別以西把尼亞ノ東方船云墨利加ヲヨリ西方ニ向ツノ間

ノ間ノ船路ニテ一島ヲ見ル名テ「カロリナ」ト云コレ其時
 ノ以西把尼亞国王カアレルトテテハ語ニテハカロリユス
 第二世ナル者ノ名ヲ以テコレニ命スルモノナリ又一島
 ヲ見ルコレヲ「サンバルナハス」ト名クコレハ古ヘノ聖人
 サンノハルナハスナルモノノ祭日ニ當リテ此島ヲ見出
 シタルニ因テ名クル者ナリ
 又新非利皮那ノ諸島ノ北方ニ當リテ小島凡五十アリテ
 其内ニ尚未ク其事状ヲ詳ニセサルモノモアリ然レモ此
 諸島ノ内以西把尼亞ニソクスルモアリテ彼海船東西往
 來休処トセリ而メ其内ニ人居ナキモアリコレヲ總稱シ

テ「キイヘン」エイラレデシト云和蘭語キイヘンハ盗ナリ
 エイラテンハ島ナリ漢

ニモコレヲ盗島ト拂郎奈語ニテハ「レイス」ラロ
 ン

スト云ヒラテン語ニテ「ハイ」インシユラト口ニエムト云

按スルニ皆盗人
 島ノ義コレ其島ノ人性甚偷盜ヲ好ムニ因テ也

和蘭ノ人オリヒイルハンノオールドナルモノ當テ船ニ駕

シテ大地球ヲ一周セシ時一千六百年日本慶長五年明万
 曆二十八年

ニ此島モ過キテ頗ル其事状ヲ得タリ又以西把尼亞ノ人

ハ此諸島ヲ名テ「イルハステラス」ヘラスト云コレハ帆島

トイヘル義ニシテ昔ヘルチナンドマゲツラ子スヨリ以

來彼国ノ海船爰ヲ過クルモノ多キニ因テナリ又名「ライ

ルハステマリアノアンナト云マリアアンナハ高夫突利
人亦馬馬泥亞十道ノ一シテ其ノ公主ノ名ニシテ以西
帝都ウエ子ニハ此内ニアル也把尼亞国ノヒリヒウス第四世ノ王ノ后也此後ノ時ニ當
リテ始メテ此諸島ニ到リテ教ヲ弘メスルニ因テ名クル
ナリ凡此諸島ノ内其著ナ者ハ

キユアムハ此諸島ノ中ニ於テ最大ナル者ニシテ北極

出地一十三度ニ當ル地因ヲ按ルニ此島ハ此諸島ノ
中ニ於テ最南ニ所在ス

以西把尼亞ノ人焉ニ小ナル要害ヲ構ヘテサニア

テロト名ケ其他モ亦三ヶ処ノ商館ヲ置キ各軍士四

五十人ヲ備ヘ毎年瑪泥尔訝呂宋ノ府トアクワヒユ

ルユ新以西把尼亞ノ海港 舟船往来ノ休歇ノ処トシ

テ瑪泥尔訝ノ指揮ヲ受ク

チニアムハキユアムヨリ少シク北方ニ所在シテ北極

出地一十五度ニ當リテ小島ナリコレ諸厄利亞ノ水

軍ノ大将セオルゲアンソナル者大南海ヨリ差ニ

来リテ一千七百四十二年日本寛保二年ニ此島ニ上
清乾隆七年

リ暫ク駐リ居テ船中ノ諸用及ヒ薪水等ヲ整シテ有

此島ノ産物頗ル豊ナリ然レ凡人居ナシ

此外此諸島ノ中ニ尚名アル者ハセラブナ一名ロタ弁ニ

アキユイキユアンセイハン等ノ島々数多アリ

利明曰新「ヒリヒナ」ノ諸島凡八十七島アリト又其北
方ニ當リテ小島凡五十島アリト云ヘリ然レモ其事
状ヲ詳ニセサル者モアリト懷フニ我邦ニ云南洋ノ
無名島ナルベシ島谷市左エ門カ記ニ豆州下田ヨリ
辰巳ニ當リ最近ナル者ヲ父島母島ト云其周廻父島
ハ凡二十里母島ハ凡一十五里許リ北極出地二十七
度渡海凡二百七十里
命ヲ奉シ新夕ニ唐船作りニ製作シテ下田ヨリ開帆針
ヲ辰巳ニ求メ八大島ヨリ青ヶ島ニ距リ猶辰巳ニ渡
海シテ鳥島ト云小島ヲ見得猶又辰巳ニ渡海セシニ

更ニ島々モ見得スシテ暫ク漂蕩スル内ニ南方ニ當
リテ島々見得シニ因テ船ヲ寄セシニ彼父島母島十
リト云ヘリコレ新「ヒリヒナ」ハ十七島ノ北方ニ所在
セル無名島凡五十島ノ内ノ島ナルベシ

田舎正言集
卷之十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

